

# ストライク・ウィッチーズ～鬼神の闘い

武御雷参型

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

国際I S委員会所属対I S部隊「天照隊」隊長、黒崎龍聖は一人、任務の為に撃した。

しかし、出撃した先で謎の重力子に巻き込まれ、機械の箒を履いてネウロイと呼ばれるモノと闘う世界へと飛ばされてしまう。

鬼神と呼ばれたマガツ・イカルガを使い、ウィッチと共にネウロイと闘い、元の世界へと戻る為に奮闘する――

※この物語は、騎士の物語とは別の黒崎龍聖の物語です。

# 目次

設定資料	1
第一話〜転移	12
第二話〜戦闘開始前	19
第二話〜エンゲージ	27
第三話〜新たな敵	34
第四話〜宮藤芳香	42
第五話〜501戦闘航空団1	52
第五話・五話〜支援艦隊	61
第六話〜支援艦隊	68
第七話〜支援艦隊到着	75
第八話〜暗躍	82
第九話〜支援艦隊、到着	90

第十話〜説明会1	98
第十一話〜説明会2	104
第十二話〜天照隊、参戦ス	110
第十三話〜休息	116
第十四話〜会谈	123
第十五話〜顔合わせ	129
第十六話〜戦闘開始(前)	135



# 設定資料

## 〈プロフィール〉

名前

・黒崎龍聖

年齢

・21歳

階級

・I S世界Ⅱ大佐相当

・ストパン世界Ⅱ大佐

所属

・国際I S委員会日本支部↓独立機動部隊 “天照隊”

役職

・総隊長

設定

元々は国際I S委員会日本支部、対I S用特殊武装隊 “天照隊” の隊長を勤めていた

が、睦月からの指示で向かった先には残党の姿がなく、重力が発生し、飲み込まれたことでストパンの世界へと飛ばされてしまう。

因みに余談だが、こちらの龍聖は騎士の物語の龍聖くんとは違います。なので、東や真姫などの婚約者はいません。なので、年齢は彼女いない歴です。ザマア（この後、マガツ・イカルガに乗ったエルとアデイによって処刑されています）

#### 名前

・ 山本智香

#### 年齢

・ 黒く消されている為、見る事ができない

#### 階級

・ IS世界 // 大佐相当

・ ストパン世界 // 中佐

#### 所属

・ 国際IS委員会日本支部 ↓ 独立機動部隊 // 天照隊 //

#### 役職

・ 副隊長

## 設定

元々は国際IS委員会日本支部、対IS用特殊武装隊「武御雷隊」の隊長を勤めていた。また、銀凰の艦長である俊輔とは結婚をして、仲睦まじい。

龍聖が失踪した知らせを受け、天照隊と共同で捜索任務に就いていた時、銀凰と紫炎の両艦を飲み込む重力に、自ら飛び込みストパンの世界へと飛ばされてしまう。

## 名前

・山本俊輔

## 年齢

・25歳

## 階級

・IS世界Ⅱ少佐相当

・ストパン世界Ⅱ少佐

## 所属

・国際IS委員会日本支部↓独立機動部隊「天照隊」

## 役職

・銀凰級IS専用航空母艦一番艦「銀凰」艦長

設定

天照隊専属艦の艦長を勤めている。また智香とは夫で、仲睦まじいが所属している部隊は別々な為、偶に合う休日には自宅でゆっくりと二人で過ごしている模様。

名前

・ 桜井悠介

年齢

・ 25歳

階級

・ IS世界Ⅱ少佐相当

・ ストパン世界Ⅱ少佐

所属

・ 国際IS委員会日本支部↓独立機動部隊 “天照隊”

役職

・ 紫炎級IS専用工作艦一番艦 “紫炎” 艦長

設定



天照隊専属艦の艦長を勤めている。目下の悩みは彼女が居ず、休みの日は自宅でダラダラと過ごしてしまっている事。

名前

・高町なのは

年齢

・25歳

階級

・IS世界Ⅱ少佐相当

・ストパン世界Ⅱ大尉

所属

・国際IS委員会日本支部↓独立機動部隊 “天照隊”

役職

・銀鳳級IS専用航空母艦一番艦 “銀鳳” 砲術長

設定

裏のボスと呼ばれており、悠介と俊輔の仲介役。因みに、本人は知らないが、艦内や

委員会内部では、白い悪m（ここから先は検閲されました）

実家の古武術『永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術』の門下生。兄であり師範代の高町恭也並びに師範の高町士郎には、まだ追いついておらず、門下生のままである。だが、実際は秘めた力を持っており、それが解き放たれ日には、師範を超える模様。ただし、これまでに解き放たれた事はない。

艦船設定

級名

・銀凰級

艦種

・IS専用航空母艦

全長

・230m

最大幅

(船体) 45m

(甲板) 55m

機関

艦船用 I S コア 2 基

姉妹艦

・ 一番艦 “銀凰” 天照隊専属艦

・ 二番艦 “紅凰” 武御雷隊専属艦

・ 三番艦 “白凰” 国連軍専属艦

武装

・ 対 I S 用対空 V L S 15 基 60 セル

・ 30 mm S I W S 10 基

・ 125 mm 連装速射砲 4 基

設定

国際 I S 委員会が開発、建造した航空母艦の一つ。主に天照隊と武御雷隊が専属艦として配備されている。尚。三番艦は国連軍専属艦として配備されている。

また、銀凰のみがマガツ・イカルガ専用の整備場を備えている。

級名

・ 紫炎級

艦種

・ I S 専用大型工作艦

全長

・ 380 m

最大幅

・ 78 m

機関

・ 大型艦船用 I S コア 2 基

・ 小型核融合炉 1 基

姉妹艦

・ 一番艦 “紫炎” 天照隊専用艦

・ 二番艦 “紫電” 武御雷隊専用艦

・ 三番艦 “紫苑” 国連軍専用艦

武装

・ 対 I S 用対空 V L S 15 基 60 セル

・ 30 mm C I W S 20 基

・ 105 mm 両用高角砲 4 基

・ 125 mm 三連装速射砲 4 基

## 設定

国際IS委員会日本支部が開発、建造した工作艦の一つ。主に天照隊、武御雷隊、国連軍の専属艦として配備されている。この工作艦の特徴として、艦内で部品の製造や修理、修復、武器弾薬の製造などが出来る様になっている。また、紫炎のみではあるが、マガツ・イカルガの弾薬を製造する装置を搭載している。

## 機体設定

## 機体名

・マガツ・イカルガ

## 型式

・IISC—X00

## パイロット

・黒崎龍聖

## 動力源

・ISコア 1基（尚、半分に割れている為、一つと明記しているが、実質は二つになる）

## 特殊装備

・小型SE発生装置 1基

### 武装

ソードレットカノン

・銃装剣 2

・多目的無線誘導兵器 “ドラグーン・ナイト” 8

・多目的有線誘導兵器 “ライフフィスト 執月之手” 4

・十二連装ミサイルポッド

・連装レールガン 2

### 設定

斑鳩のセカンドシフトした機体。コアが分裂した事により、人格も二等分された。二等分になったお陰で、龍聖一人で扱えないドラグーンや執月之手を補っている。チート過ぎて、ネウロイ涙目必須の機体。因みに余談ではあるが、亡国機業やログスなどからは鬼神と呼ばれている。敵に回ったら面倒だが、仲間であれば心強い機体。

### 機体名

・カルデイトーレ

### 型式

・IISC—XI

パイロット

・山本智香

動力源

・I S コア

特殊装備

バックウエポン

・背面武装改

武装

・アサルトライフル

・ハンドガン

・対装甲振動重斬刀

・シールド

設定

国際I S委員会日本支部と黒崎重工が共同で開発した第三世代型量産機。日本支部と自衛隊に配備されている。

試作量産機のテレスタールの改良機で、バックウエポンには多種多様な装備を付け替えられる様になっている。また、自立A Iが内蔵されており、パイロットの音声認識で、バックウエポンを使う事が出来る様になっている。

## 第一話～転移

国際 I S 委員会日本支部、支部局長室では一人の男性と、一人の青年が向き合って話をしていた。

「さて、黒崎君。今回は君に任せたい任務がある」

国際 I S 委員会日本支部局長である山本睦月が二枚の用紙を青年に差し出した。

「拝見させて頂きます……………武装組織の殲滅…ですか？」

睦月から差し出された用紙を見ていた青年は、国際 I S 委員会対 I S 部隊「天照隊」隊長の黒崎龍聖である。

「そうだ、君には一人で対処できると思いいこの任務を任せたい」

「……………」

龍聖は渡された二枚目の用紙に目を通し始める。

「敵の戦力は第二世代機が中心……………第三世代機が出てくる可能性は？」

「無い……………とは言い切れないが君のマガツ・イカルガであれば問題なからう？」

「それを世間一般では、慢心、ダメ、絶対と言われているんですよ……………まあ、仕方が無いですね。他の隊員も別の任務に就いていますし……………承知いたしました。黒崎龍



聖、任務を承諾いたします」

龍聖はそう言うと、敬礼をして部屋を後にした。

そして、残された睦月は静かに龍聖の背中を見つめるのであった。

## 第一話く転移く

「それで、出撃したのは良いのだが……………」

〈本当に、ここであっているの?〉

〈I Sの反応が一つも感じられません……………もしや、仕組みられた罠なのではないのですか?〉

マガツ・イカルガを身に纏う龍聖は、睦月から差し出された、敵組織の根城付近まで接近したがI Sのコアの反応が一つもなく、おまけに、人の気配すらしなかったのであ

る。

「だが、俺も何度も見てきた命令書だったぞ……それに、睦月さんが俺を消したいと思う様な事はしていないのだが？」

「でも、今回の任務って武装組織の殲滅なんですよ？　なのに、建物一つもないっておかしくない？」

「確かにアデイの言う通りです。ここは一度、撤退をしてもう一度、命令書の確認をした方がいいと思いますよ」

マガツ・イカルガのコアであるエルとアデイの二人に説得され、龍聖は一度、帰還しようと考えた瞬間であった。

「!?　未確認熱源反応複数を感知!!　これは……」

エルが何かを感知した様子で、龍聖に報告をするが、ISではない何かの反応で、エルは如何報告したらいいのか判断が出来ずにいた。

「ISではないという事だな？」

「はい!!　ですが、ISとは別の何か……こうなんと言ったらいいんでしょうか………ともかく、一度撤退して、部隊を再編制して出撃した方が身の安全を守るには最適だと思います!!」

「エル君の意見にさんせーい!!　マスター、一度、撤退しよ!!」

エルとアデイの言葉に龍聖は納得し、機体を戻そうとした。だが、後方から重力子反応が発生し、機体がズルズルと引き寄せられてしまっていた。

「?! 後方から強力な重力子反応です!! このままの出力では重力子に巻き込まれます!!」

「チツ!! 機体が引つ張られる……………最大出力でこの重力子から脱出する!!」

「<了解!!>」

龍聖の言葉にエルとアデイは返事をする、マガツ・イカルガの出力を最大限に引き延ばした。だが、それでも機体は徐々に重力子反応する場所へと引きずられていった。

「<後方から攻撃来ます!!>」

「こんな時に限って!!」

すると、重力子反応がある方向から赤いビームの様なものが龍聖に向かって襲い掛かってくる。

「<武装を展開してしまうと、機体出力が安定しません。このまま、逃げ続けてください!!>」

「簡単に言ってくれるね!!」

エルの言葉に龍聖は小言を言うが、エルの言う通り武装を展開してしまうと空気抵抗により、機体の出力が安定しないデメリットがある為、闇雲に武装を展開する事が出来

ず、ビームの様なものからの攻撃を回避しつつ、脱出を試みていた。だが、それは終わりを告げようとしていた。

ビームが地面を攻撃し、巻き上げられた土などが龍聖に向かってくるからである。

「チツ!! へこまでかよ!!」

龍聖はその言葉を最後に、土と共に重力子反応する場所へと引つ張られ、そして、龍聖を飲み込んだ瞬間、重力子反応は消えるのであった。

これにより、龍聖は任務中に行方不明になったことからM I A認定されるのであった。

だが、一人だけ龍聖がM I Aになったことを信じられずにいた者だけが、極秘裏に龍聖の居場所を探すのであった

〈マスター!! マスター!!〉

〈起きて下さい、マスター!!〉

「俺……………は……………海……………!!」

龍聖は森の中にいたのにも関わらず、気付けば海の上を飛行していた。

〈漸く起きたんだね、マスター!!〉

〈僕たちはいつの間にか海の上を飛行していますが、機体に問題はありません〉

「どういう事なんだ……………ん?」

龍聖は何かを感じ取り、ハイパーセンサーを起動させた。

〈どうかしたの、マスター?〉

〈アデイ、あれを見てください〉

〈あれって……………戦闘してる!!〉

「ああ、何故だか知らんが空母が狙われている……………エル、通信を送ることは可能か?」

龍聖は前方で戦闘が行われている事に気付き、エルに通信を試みるように伝える。

〈少しお待ちを……………ダメです。全ての通信を試してみましたが、応答ありません〉

〈もしかして、やられちゃったんじゃない?!〉

「可能性はある……」

龍聖はハイパーセンサーの感度を最大にして、確認をすると、空母の周りに大型の未確認機が飛んでおり空母や駆逐艦などを攻撃しているのを確認する。

「……………空母がやられている可能性はあるが、黙ってみていられる程、天照隊隊長を務めていないからな!! 行くぞ!!」

〈了解!!〉

龍聖はマガツ・イカルガの推進力を最大にして戦闘空域へと向かうのであった。

## 第二話く戦闘開始前

前回のあらすじく

龍聖は一人、武装組織殲滅の為に出撃した。だが、行った先では敵の反応も人の反応が無い状態であった。マガツ・イカルガのコアであるエルとアデイは撤退を進言し龍聖は撤退しようとした時、重力子に引っ張られ、異世界へと飛ばされてしまう。

そして、龍聖は前方で行われている戦闘に介入するのであった。

第二話く戦闘開始前く

龍聖は戦闘が行われている所に急いで向かっていた。

「敵の反応は解るか？」

〈未確認飛行物体です。データに情報がありません〉

〈何……あれ……〉

龍聖とエル、アデイは前方で飛んでいる飛行物体に驚いていた。

「何であれ、通信を行わなければ話にならない……そうだ」

〈何か良い方法でもありましたか？〉

「もしかしたらいけるかもしれない。エル、回線の電波をキャッチして解析できるか？」

〈やろうと思えば出来ませけど……まさか!!〉

「そのまさかだよ」

龍聖は空母の通信電波を解析して、通信を試みようと考えていたのである。

〈少し時間をください〉

「どの位で出来る？」

〈………1分は欲しいです〉

「了解。なら、こっちはこっちで勝手に始めますか!! アデイ、エルの分も頼めるか？」

〈了解!!〉

「よし、行くぞ!!」



龍聖はマガツ・イカルガを未確認機体の方へと飛翔する。

その頃、扶桑海軍旗艦、航空母艦「赤城」ではネウロイからの攻撃に耐えていた。「全艦隊に通達。進路を維持しつつ、全力で回避運動を取れ。繰り返し。進路を維持しつつ、全力で回避運動を取れ」

赤城の指示で、艦隊が赤城と同じ方向へ逃げていく中、ネウロイは駆逐艦を中心に狙い、また、撃沈させるような真似をしなかった。

「奴め、何故一思いに攻撃をしてこない」

「我々を弄んでいるつもりでしょうか……」

「全航空機部隊を発艦させる……窮鼠猫を囓むをネウロイに思い知らしめてやる」  
「はっ!!」

艦長の指示で赤城に搭載されている航空機部隊がネウロイ撃墜の為に出撃していった。

赤城救護室には、一人の少女がベッドに座って震えていた。少女は扶桑から父の手紙を頼りに、海軍少佐である坂本美緒に連れられて欧州へと向かっている最中に、戦闘に巻き込まれてしまったのである。

戦争とは無縁で育ってきた彼女にとって、ネウロイからの攻撃は恐怖でしかなかった。

すると、救護室の扉が開き、一人の士官が入室した。

「宮藤」

「ッ!!」

士官に名前を呼ばれた少女、宮藤芳香はいきなり自分の名前を呼ばれたことに驚き、顔を上げる。その表情は恐怖から強張っていた。

「なんだ、その顔は。情けないぞ。それでも扶桑の撫子か？」

士官は芳香の傍へと寄る。

「でも……どうしても、震えが止まらないんです……」

「はあく。仕方ないな」

士官はそう言うと、芳香の目線と同じ様になる為にひざを折った。

「さあ、顔を上げてこつちを向け」

士官に言われた通り、芳香は顔を上げて士官を見つめた。すると、士官は芳香の右頬に手を当てた。

「さ、坂本さん!!」

「動くな」

芳香に坂本と呼ばれた士官は、芳香の顔をじつと見つめ、後数センチほどで唇が当たるかと思ったとき、右耳の中に何かが入って来る感覚に芳香は驚いた。

「はうっ」

「インカムだ。それさえあれば、離れていても私と通話ができる」

「はあ」

芳香は坂本にキスをされると、少し、ほんの少しだけ期待をしていたのだが、現実とは違い坂本は芳香を安心させる為に、インカムを芳香につけたのである。

「ただし、使うのは本当に困った時だけだぞ? いいな」

「は、はい」

すると、赤城船体がネウロイの至近攻撃を受け揺れた。

「さ、私は本当にいいかないと」

坂本はそう言うのと立ち上がった。

「さ。坂本さん……本当にた、闘うんですか?あれと……」

「そりゃそうだ。それが私の使命だからな」

芳香は自問自答する。今ここで自分が出来るのかを……だが、答えは見つかることはなかった。だが、一歩進める為に立ち上がった。

「私……私は……」

「お前はここにいろ。決して外に出るんじゃないぞ」

「でも……」

芳香は坂本の事が心配であった。

「私の事を心配してくれているのか？ 大丈夫だ。安心して見て居ろ」

そう言うと坂本は救護室を後にした。

「坂本さん……」

芳香はそんな坂本の背中を見つめる事しかできなかった。

赤城甲板には17機の九六艦戦と先頭に坂本の姿があった。

『対空砲火やめ、繰り返す。対空砲火やめ。各自、戦闘機部隊発艦に備えよ』

坂本はストライカー零式艦上戦闘脚二二型甲を着脚して出撃のタイミングを見計

らっていた。

そして、ストライカーの魔導エンジンが温まったのを体感で感じ、出撃をする。

「坂本美緒、発進する」

坂本はそう言うと、甲板を滑る様に出撃していき、艦戦隊もついていくように出撃していった。

へマスター、空母から艦載機が出撃した模様。また、先頭にはISとは違った何かを使っている女性を確認しました

「どういう事だ？」

龍聖はハイパーセンサーの感度を最大にして、航空機の方を注視する。すると、戦闘機群の中に何かを履いて飛んでいる女性の姿を確認した。

「あれは……?」

〈さあ、解りませんが……ですが、一つ言えることは敵ではないという事です〉

「そりやそうだろ。まあ、何でもいいか。行くぞ」

〈〈了解!!〉〉

龍聖は戦闘に加勢するべく、スピードを上げる。

〈それと、マスター。一つ報告が〉

「なんだ？」

エルが龍聖に一つ、報告を上げた。

〈通信電波の解析が完了しました。また、彼女たちの通信電波も確認しました。どちら  
も同じ回線を使っているので通信が可能となりました〉

「了解した。さて、戦闘開始だ!!」

## 第二話くエンゲージ

ソレデットカノン  
龍聖は空母へと攻撃を仕掛けようとしているネウロイに対して、牽制を兼ねて銃装剣の引き金を引く。それと同時に、航空機群と先頭でネウロイと闘っている女性、空母に通信を入れた。

「こちらは国際ＩＳ委員会日本支部所属、対ＩＳ用部隊“天照隊”隊長の黒崎龍聖です。応答をお願いします」

『……………こちらは扶桑海軍少佐、坂本美緒だ。先ほどの攻撃は貴殿の攻撃か？』

「そうですが……………扶桑……………？ 日本ではないのですか？」

『日本だと？ そんな国の名前など聞いたことが無いぞ？』

龍聖はまさか自分が違う世界へと飛ばされた事に今になつて気付く。

「そう言う事か……………お互いに何か認識が違う様なので、この戦闘が終了した後には話し合いの場を設けて頂きたいのだが、可能でしょうか？」

『……………可能であると思う。だが、今は戦闘中だ。先の事は戦闘が終了した後でも良いか？』

「そうですね。それから、敵の情報を頂きたいのですが」

『?』 ネウロイの事を知らないのか?』

異形の存在の名をネウロイだという事を龍聖は知る。

「いえ、ネウロイとは何かすら知りません。何せ、先ほどまでとある任務の為に山間部に行っていたのですが、気付けば海上でしたので……………」

『……………ネウロイを撃破する為には、コアを破壊しなければならぬ。コアは装甲内部のどこかに存在しているが、今の私の魔眼で調べたいのだが、ネウロイからの攻撃が激しくオチオチと探す事が出来ない』

「判りました。航空部隊を下がらせてください。これより、誘導兵器を使用します。その為には、航空機の存在が邪魔でしかありませんのでいったん、下げてもらっても構いませんか?」

龍聖からの要請に美緒はどうすべきか判断を迫られるが、もしかしたら龍聖が敵の可能性があると考え、その提案を却下した。

『すまないが、そちらの要求を呑む事は出来ない。まだ、味方と判断した訳ではないからな』

「なるほど、確かに言われてみればその通りですね。判りました。では、一方的に攻撃を行いますので、航空機隊はネウロイに対しての攻撃を一旦、中止してもらえませんか?」

最悪の場合、航空機隊を誤って攻撃してしまう危険性がありますから」



『……………いいだろう』

「感謝します」

龍聖からの譲歩に美緒は飲むことにした、

『各航空機隊へ通達する。ネウロイに対しての攻撃を中止。繰り返す、ネウロイに対しての攻撃を中止。これより、未確認機による攻撃が来るぞ。巻き込まれたくなければ、散開して距離を取れ』

『了解!!』

美緒からの通達に、航空機隊は全機がネウロイに対しての攻撃を中止して距離を取った。

「航空機隊の避難を確認。行くぞ、エル。アデイ!!」

〈了解!!〉

龍聖は、マガツ・イカルガのバックパックに収容されている多目的無線誘導兵器「ドラグーン・ナイト」と多目的有線誘導兵器「ラフフィスト執月之手」を射出する。

「エルはドラグーンを使ってネウロイをかく乱しろ。アデイはラフフィストでネウロイを固定。いけるな?」

〈判りました、ドラグーン・ナイトに接続を確認〉

〈了解、ラーちゃんの接続を確認かんりよー!!〉

龍聖が射出したドラグーン・ナイトと執月ラーフフィスト之手の操縦権を得たエルとアディは、夫々に任された装備に回線を接続し使用する事が出来るようにする。

「坂本少佐、聞こえていますか？」

『聞こえているぞ』

龍聖はネウロイに単騎で戦っている美緒に通信を繋げ、作戦内容を伝えた。

『そんな事が可能なのか？ いや、疑うのは良くないな。了解した。では、固定した後  
に、ネウロイのコアの場所を特定すれば良いのだな？』

「はい、その通りです。後は自分が決めますから……………それで宜しいでしょうか？」

『……………作戦内容としては申し分無いな……………だが……………いや、その話は後にしよう。

では、頼むぞ』

「了解しました」

龍聖は美緒がネウロイから離れるのを待った。そして、ある程度の距離まで離れたのを確認すると、エルとアディに指示を出す。

「行くぞ、二人とも!!」

〈了解〉

龍聖は銃装剣ソフテットカノンを掲げると、引き金を引きネウロイからの攻撃を引き受ける。

「これでもくらえ!!」

龍聖は腰部に装備されている連装レールガンをネウロイに放った。すると、音速で放たれたレールガンの砲弾は綺麗なまでにネウロイに直撃し、装甲の一部を削り取った。ネウロイは堪らず悲鳴のような声を出したが、龍聖自身の攻撃の手を緩めるつもりは無かった。

「追加でこれも持つていけ!!」

ソレツトガン

銃装剣を量子変換した龍聖は新たに12連装ミサイルポッドを展開すると、引き金を引き全弾ネウロイに命中させる。

「エル、アデイ!!」

〈あつたれえええ!!〉

〈行っちゃつて、ラーちゃん!!〉

エルがコントロールするドラグーン・ナイトがネウロイの周りを囲み、ビームを使って檻を作ろうとする。だが、ネウロイも簡単にそうさせるつもりは無かった。ドラグーン・ナイトに対して、ビームを放ち破壊しようとするが、コントロールをしているのがエルの為、簡単に撃破されることはなかった。だが、ネウロイからの攻撃が激しい為、ドラグーン・ナイトの攻撃が出来ずにいた。

〈マスター、敵からの攻撃が激しくドラグーン・ナイトの攻撃が出来ません〉

〈敵が強すぎるよ!!〉

「チツ、そう簡単にやらせてはくれないか……………仕方が無い。ワンオフを使う他無いかな……………」

「<では、僕たちはマスターの周囲で護衛をすれば宜しいですか?>

「そうだな。なら、それでいくぞ」

「<<了解!!>>

マガツ・イカルガの単一仕様特殊才能ワンオフ・アヒリテイ「風殺裂斬ふうざつれつざん」を使う為には、ネウロイからの攻撃を掻い潜らなければならないという問題が残っているが、今はそうせざるを得ない状況なのである。

すると、今まで静かだった美緒から通信が入る。

『こちら坂本だ、敵の懐に入りたいのか?』

「はい、ですがネウロイからの攻撃が激しい為に、懐に入る事が出来ない状況です」

龍聖は正直に今の状況を打開する事が出来ない事を美緒に伝える。すると、美緒はあの事を龍聖に伝えた。

『一つ、ネウロイの懐に入る方法がある』

「……………因みに内容は?」

『私が先頭に立ってシールドを展開しながらネウロイに突っ込む』

「……………そのシールドは強固なものですか?」

『ネウロイのビームは簡単に防ぐ事は出来るが、限りがあるのは確かだ』

龍聖は美緒を先頭に立たせシールドを展開したまま、ネウロイの懐に突撃する方法を採用しようとした。すると、美緒から続けざまに通信が入る。

『あと一つ、吉報だ』

「聞きましょう」

『ブリタニアにある第501統合戦闘航空団がこちらに向かってきているとの事だ』

「増援、と言う事ですか………到着予想時間は？」

『予定では20分だ』

「なら、その時間までにネウロイを倒すか、増援が到着後に撃破するかの二択、と言う事ですか………確実なのは増援を待つて撃破する事がセオリーですが………」

『ああ、だが赤城や他の駆逐艦がそれまでに持つてくれるかな』

龍聖と美緒の見解は一致していた。

「『なら、やることは一つ!! 空母や他の駆逐艦にネウロイを近づけさせない。それ一つ!!』」

龍聖と美緒はネウロイの攻撃から空母や駆逐艦を護る事にシフトチェンジする事に決めたのであった。

## 第三話く新たな敵

ネウロイからの攻撃に船体を揺らす赤城の救護室にただ一人残された宮藤芳香。彼女は、自分に何が出来たのか考えた結果、自分が治癒魔法が使える事を思い出した芳香は、傷ついた将兵を治癒魔法で癒そうと決心する。

「ここにゐるもの全てを詰め込んで……よし!!」

芳香は救護室にあつた薬品を鞆に詰め込むと、救護室を後にし真っ先に向かったのは甲板下船体部であつた。芳香は美緒からつけられたインカムを使つて美緒に通信を入れる。

「坂本さん、坂本さん大丈夫ですか?!」

『そこで何をしている!! 部屋から出るなど言つたはずだろう!! 戻れ!!』

「坂本さん、無事だつたんですね……良かった」

芳香は美緒が撃墜されていない事を安堵した。だが、美緒は芳香が部屋から出た事を怒つてゐた。

『宮藤、戻れと言つたのが聞こえなかつたのか!! そこはお前の居場所じゃない!! 邪魔になるだけだ!!』

「でも、私も……私にも出来ることをしたいんです!!」

芳香は自分が出来ることをしたいと美緒に伝える。だが、美緒はそれを否定する。

『今のお前に出来る事は無い。早く部屋に戻れ、良いな!!』

美緒はそう言うのと通信を一方的に切った。

「坂本さん……坂本さん!!」

芳香は美緒から通信が切られた事に気付くと、部屋に戻らずに甲板上に行き負傷した兵士の治療をしようとした。

『すまない、恥ずかしいところを見せたな』

「いや、大丈夫です。それで、まだ行けそうですか?」

ネウロイの攻撃を回避しながら龍聖と美緒は通信をする。

『こちらは大丈夫だ……私も負けてられんな。一つ、具申してもよいか?』

「何でしょうか？」

『私には刀がある。この刀は特別でな。ネウロイの装甲を切る事が可能だ』

「……………では、自分が囷となってネウロイをひきつけましょう」

『よろしく頼む』

龍聖は銃装剣ソウテツトカソウケンを掲げると、ネウロイに向けて引き金を引く。

「こつちだよ、ウスノロ」

龍聖の声が届いたのか判らないが、ネウロイは着実に龍聖の方へと敵意を向ける。だが、ネウロイは忘れ物と言っているかのようにビームを放ち、駆逐艦一隻を撃沈させた。「チツ、こつちだけを見て居ればいいものを……………坂本少佐!! いけますか!?!」

『感謝するぞ!! やあああああつ!!』

美緒は背中に背負っている刀“扶桑刀”を引き抜くと、ネウロイに切りかかった。すると、装甲と扶桑刀が触れ合った瞬間、ネウロイの装甲の硬さに扶桑刀は悲鳴を上げそうになっていた。

『まだまだあああ!!』

美緒は扶桑刀に魔力を注入すると、刀の方が装甲に打ち勝ち、ネウロイの装甲を切り捨てることに成功する。

だが、コアを破壊する事が出来ず、ネウロイは装甲を回復していた。



『チツ、やはりコアを破壊しなければならぬか』

「坂本少佐、コアの位置は解りますか？」

『コアはネウロイの中心部に存在している……まさか?!』

「そのまさかですよ。安心してください。こちらとしても打って付けの兵器がありますから……いけるな、アデイ、エル？」

〈へ行けます!!〉

龍聖はエルとアデイの返事を聞くと、一本の刀を展開した。

「エルはドラグーンで再度、かく乱。アデイはミサイルポッドと銃装剣ソーデットカブシを使ってエルと

共にかく乱をしろ」

〈へ了解!!〉

龍聖が展開した刀は、かつての斑鳩に搭載されていた大型隊装甲重斬刀菊ガイベラ・ストレート一文字であつた。

それと同時に単一仕様特殊能力を発動させる。

「行くぞ、嵐の衣!!」

マガツ・イカルガの周囲に嵐のような風が吹き荒れ、ネウロイからのビーム攻撃を弾いていた。

『ビームを……弾くだと?!』

美緒は目の前で起きた事に驚きを隠せずにした。誰も、シールドを展開しなければネウロイが放つビームを防ぐ事が出来なかったからだ。だが、目の前では嵐のような風がビームを弾きながらマガツ・イカルガを護っていたのである。驚くなど言うのは無理な話である。

「いつけえええええええ!! 霸王弾・空・斬!!」

龍聖が振りかぶった一振りは、斬撃を発生させてネウロイを縦に真っ二つにしたのである。それと同時にコアも破壊する事に成功し、ネウロイは白い破片を撒き散らしながら消滅していった。

「ふう〜、やっと戦闘が終了した」

『……………』

「坂本少佐? 聞こえていますか?」

『あ、ああ。聞こえているが……………凄まじい威力だな……………』

「まあ、これでもまだまだ改良の余地が残っているんですけどね……………ん? この感覚……………まさか!」

『どうかしたのか?』

龍聖は何か嫌な感覚がした。それは紛れもなく一度や二度の会敵で感じたものではなかった。

すると、キィイーンと甲高い音がしたと思つた瞬間、一隻の駆逐艦が爆発し轟沈した。  
『なっ!! ネウロイか!!』

「いや、ネウロイではないですね……………こいつは……………まさか生きていたのかよ……………」  
オベロン  
小王!!』

『フハハハハハ!! 貴様に付けられた傷が痛むと思つてな来てみれば……………まさか貴様がいたとはな……………黒崎龍聖!!』

龍聖にオベロンと呼ばれたのは一機の I S であつた。

『傷が……………傷が痛むんだよ!! 疼くんだよ!! この痛みを貴様にも与えなくては気が済まないんだよ!!』

「チツ!! 坂本少佐、コイツはネウロイよりも厄介な存在です。すぐに撤退を!!」

『それではお前が!!』

「こいつは俺一人で倒しますから、貴女はすぐに空母に戻つて下さい!!」  
龍聖はそう言うのと、通信を一方的に遮断した。

『良いのかよ? お前ひとりで俺を倒せるとでも思っているのか?』

「倒す、じゃないと貴様はまた繰り返すつもりだろ!! 亡国機業と同じ様に!! 人類と人類の戦争を!!」

オベロンと呼んだ男は、かつて亡国機業のトップに君臨しており、亡国機業討伐作戦

で多くの犠牲を払って倒したはずだが、今龍聖の目の前に存在していた。

「なぜ貴様が生きている………貴様の息の根を止めたのは俺だ。その亡骸も焼き払ったはず………なのはどうして!!」

『さあな、貴様に殺されたと思っただらなぜかこの世界に来ていたんだよ………だが、こっちの世界も中々に面白いぞくだって俺今、ネウロイを従えてるもん』

「はっ。」

オベロンはまさかネウロイを従えているといったのである。

「と言う事は、貴様を倒せばネウロイは消滅するという話かよ!!」

『ん、合っていると言えば合っているし、間違っていると言えば間違っているね』

「貴様を今ここで倒す!!」

『おうおう、こっわいねくでも、貴様一人で俺を倒せるとでも思っているのかな?』

オベロンは龍聖を小馬鹿にした様子で見ている。

『そうだ!! 手始めにあの空母を沈めちゃうか!! あつても貴様がいると出来ないから

く………おいで、可愛い僕たち』

オベロンがそう言うのと、上空から先ほどと同型のネウロイが二体、降下してくる。

『貴様はこの子たちと遊んでよ。その間に空母を沈めちゃうから』

「待て!! チツ!! 邪魔だ!!」

龍聖はオベロンを追いかけようとしたが、ネウロイが行く手を阻み龍聖をオベロンの元へと近づけさせないようにしていた。

## 第四話～宮藤芳香

オベロンは空母赤城の上空にまで来ると、長射程荷電粒子砲「アグニ」を展開し、照準を赤城に定めた。

「沈んじやえ」

オベロンが引き金を引いた瞬間、銃弾がオベロンの幻<sup>ミステイク・ピースト</sup>緑獣騎に当たり極僅かの揺れを引き起こし照準がズレ赤城の至近距離に着弾した。

「チツ!!」 アイツに送ったネウロイが倒されたのか」

オベロンは銃弾が飛んできた方を見ると、龍聖ではなく、美緒が機関銃をオベロンへと向けていたのである。

「へえ、今度は君が僕の相手をしてくれるのかい? でも、そんな貧相な飛行ユニットで僕に敵うとも思っているのかな?」

「そんなこと、やってみない事には判らないだろう」

「確かにそうだね……でも、君は何もできないまま僕に撃たれる。これが必然だよ?」  
そう言うと、オベロンはアグニを美緒へと向けた。

「私は扶桑海軍の一少佐。ネウロイなどに負ける訳にはいかない!!」

美緒はそう言うと、機関銃の引き金を引きオベロンを攻撃した。だが、オベロンは銃弾が見えているのか回避されてしまう。

「そんな小さな弾が当たる訳ないじゃん。ほら、これでも喰らいな!!」

オベロンはアグニのアグニの引き金を引く。すると、ネウロイから放たれるビームよりも強力なビームが放たれた。

「チツ!!」

美緒は緊急回避をするが、オベロンはそれを見越して次々とアグニの引き金を引く。

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうしたのかな? 回避ばかりじゃ僕に攻撃なんてできやしないよ?」

オベロンは余裕をこいて美緒を攻撃していた。だが、美緒にはある考えをもっていた。

「そろそろ、501部隊が到着する頃な筈だが……」

「あつ、そう言えば言っただけだね。君が待っている部隊……僕が先にネウロイを仕掛けてそつちに悪戦苦闘している様子だよ」

「なにっ!!」

「君の考えは読んでいるんだよ。こうして僕を足止めして、後続からくる支援部隊と共に僕を討とうとしているとね……だけど、残念だったね。その策は使えない様に僕が

先手を打っていたんだよ」

「クツ!!」

美緒はまさか、自分の作戦が露見されているとは思わず、下唇をかみしめた。

「もう少し、君と遊んでいたかったんだけどね……飽きちゃった。だから、君を討つ前座として……あの空母を沈めちゃうね」

「ま、待て!!」

美緒の制止も虚しく、オベロンは空母赤城の上空に到着する。

「さあ、黒崎龍聖。君の目の前で命の華を咲かせてあげよう」

オベロンはそう言うと、アグニのエネルギーを充填させる。

「エネルギー充填完了。 さあ、僕に命の華を見せてくれよ!!」

オベロンはアグニの引き金を引いた。そして、赤城に当たり貫通すると思つた瞬間であつた。

「な、なにつ!!」

なんと、赤城を護るかのようにウィッチによるシールドが張られたのである。



時をオベロンが放ったアグニが赤城の至近弾で済んだ所まで遡る。

赤城の通路で芳佳が座り込んでいた。

「人が落ちたぞ!!」

「手隙の乗員は直ちに救助を。分隊、左機銃へ。急げ!!」

赤城艦内はオベロンから放たれた攻撃によりパニックが起きていた。

芳佳は甲板で言われたこと。美緒から言われたことを思い出していた。

『ここはお前の様な子供がいる場所じゃない!!』

『そこはお前の居場所じゃない。邪魔になるだけだ!!』

「(私にできる事なんて何も無いのかな……)」

芳佳は自分が今ここで何をしなければならぬのかが判らなくなってしまった。そして、芳香は重度のストレスで倒れてしまった。

すると、芳香の耳元で最愛の父親の言葉が聞こえたのである。

「(芳佳、芳佳、芳佳)」

「(お父さん、ごめんなさい。私、何もできない……)」

「（芳佳、お前は母さんやおばあちゃんに負けない、大きな力がある。そんな力でみんなを守る立派な人になりなさい）」

「（お父さん）はっ!!」

芳佳は父親の言葉を聞き、目を覚ました。すると、いつの間にか格納庫で倒れていた。そして、芳佳の目の前には台座に置かれたストライカーユニットが目に入った。

「（これを使えば、坂本さんと一緒にみんなを守る……）」

芳佳は決心して、ストライカーユニットに足を入れ、魔導エンジンに火を入れた。

「これって、どうやって上に上がればいいんだろう……」

「（芳佳、お父さんに任せない）」

「えっ?」

芳佳は上に上がる方法を探している時に、父親の声を確かに耳にした。すると、勝手にエレベーターがせり上がり始めたのである。

「お父さん………ありがとう。私、みんなを守る立派な人になるよ!!」

そして、エレベーターがせり上がった瞬間、オベロンから放たれたビームを目にした。〔みんなを守るんだ!!〕はああああああ!!

芳佳はとっさの判断で、手をビームの方へと翳した。すると、シールドが展開されてビームを阻んだのであった。

そして、時は戻る。

「まだ、ウィッチが残っていたのか!!」

オベロンは芳香の存在に驚き、真面に充填をしていないアグニの引き金を引く。放たれたビームは赤城を貫通させ、爆発を起こした。

爆発の影響で、芳佳は態勢を崩し、墜落したかのように見えた。だが、それは違った。

「飛べえええ!! 宮藤!!」

美緒の声もあつて、芳佳は海面擦れ擦れを飛び、上昇した。

「飛べた? 飛べたああああ!!」

「なんて奴だ。初めてストライカーを履いたというのに……」

「坂本さあああん!!」

芳佳はまっすぐに美緒の元へ向かった。

「避ける、宮藤!!」

「えっ?」

「死ね!!」

芳佳の後ろに回ったオベロンは、芳佳にアグニ照準を合わせて引き金を引いた。

「やらせはしない!!」

芳佳とオベロンの間に立ったのは龍聖であった。龍聖はマガツ・イカルガに風の衣ストームコートを纏った状態で立っていたのである。

「間に合ったか!!」

「遅くなりました、坂本少佐」

足止めとしてネウロイを二体を相手していた龍聖であったが、アデイとエルの力をフル活用して撃墜させて美緒と芳佳の元へと来たのである。

「チツ、二体のネウロイまでも倒したのか……………」

「形勢逆転だな、オベロン!!」

龍聖は銃装剣ソレデットカインをオベロンへと向けた。

「クク……………アハハハハハ!!」

「何が可笑しい!!」

急に嗤い出したオベロンを龍聖は咎めた。

「なに、これで形勢逆転だと思っているのか?」

「なに? まさか!!」

「そのままかだよ!! 行け、ネウロイ!! 艦隊諸共、弄り殺しにしまえ!!」

オベロンがそう言うのと、何処からともなく先ほどと同型のネウロイが三体も現れたの

である。

「さて、僕はこのまま引かせてもらおうよ」

「逃がさねえよ!!」

「僕を追うのは構わないが、彼らはどうなるのかな?」

「……………チツ!!」

龍聖はオベロン追撃を諦め、芳佳と美緒の元へと向かった。

「……………君を殺すのは僕だ。それまで死ぬんじゃないぞ、黒崎龍聖」

オベロンはそう呟くと、姿を消した。

龍聖は通信を二人に繋ぐ。

「こちら、黒崎龍聖。二人とも、下がってくれ。三体纏めて撃墜させる」

〈そんな事が可能なのか?〉

〈えっ?〉

龍聖からの言葉に二人は驚く。

「可能です。ですが、お二人がいると巻き添えを食らう可能性があるのです、退避をお願いします」

〈……宮藤、下がるぞ〉

〈いいんですか、坂本さん〉

〈奴の事を信じてやれ〉

〈判りました〉

「ありがとうございます」

美緒は龍聖の言う通りに芳佳と共に下がった。

「行くぞ、アデイ、エル」

〈了解!!〉

「マルチ・ロックオン・システム起動」

龍聖の目の前にターゲットを表示させるもいたーが展開される。すると、自動的に三体のネウロイをロックする。

「全弾、持って逝け!! ハイマツト・フル・バースト!!」

〈ハイマツト・フル・バースト〉

銃装剣、ドラグーン・ナイト、ライフファイスト執月之手が持つアサルトライフル、十二連装ミサイルポツ

ド、連装レールガンの計三十発の銃弾、ビームが三体のネウロイに向かって放たれた。

これにより、ネウロイは何もできないまま、コアを撃ち抜かれて消滅したのである。

「敵の消滅を確認………」

こうして、ネウロイからの脅威から艦隊や美緒、芳佳を守った龍聖は、美緒の元へと向かったのであった。

## 第五話く501 戦闘航空団1

オスロン  
小王が撤退する際に差し向けたネウロイ三体を、一瞬で消滅させた龍聖は扶桑海軍の赤城甲板に着陸する。

すると、ストライカーを履いていない美緒と芳佳、他に銃を持った軍人が龍聖を取り囲む。

龍聖は、マガツ・イカルガを量子変換させ、美緒と対峙した。

「先ほどの援護、感謝する。幾つか聞きたい事があるのだが、良いか？」

「こちらとしても、お聞きしたい事があります」

「なら、会議室を………と言いたいのだが、先ほどのネウロイとの戦闘と、未確認兵器との戦闘でこの赤城も、損傷を受けてしまっていてな。すまないが、近くに基地があるので、そこまで待っていてもらえないだろうか？」

美緒の言葉に龍聖は辺りを見回すと、甲板の至る所から黒い煙が上がっており、他にも、海上では駆逐艦等も損傷を受けてしまっている状態であった。

「確かに、この状態では話し合いをする訳にもいけませんね」

龍聖は美緒の言葉に了承をすると、遠くの方から航空機のエンジン音らしき音が近づ



いてきた。

「……………ネウロイ……………ではなさそうですね」

「ああ、この近くにあるブリタニア基地に配属されているウィッチだ」

美緒はそう言う手を振った。すると、一機が近づいてきた。

「美緒、大丈夫だった!!」

「ああ、そちらも大変だったんじゃないか?」

一人の女性がストライカーを器用にホバリングさせて美緒に近付く。

「ええ、扶桑海軍艦隊がネウロイに攻撃を受けているって聞いて、発進した瞬間、何処からかネウロイが現れて、戦闘になってしまったわ」

「だらうな……………」

「え?」

美緒が知っている素振りを見せたので、女性は驚いていた。

「知っていたの?」

「いや、知っていると言うよりも、知らされた、と言ったところか」

「どういう事なのか、説明して頂戴」

「そうだな、黒崎。少しいいか?」

美緒は近くにいた龍聖を呼び寄せた。

「何でしょうか、坂本少佐？」

「貴殿は……と言いたい所だが、どこの所属なのか聞いていなかったな。今聞いてもよいか？」

「ええ、確かにそうですね。初めまして、国際IS委員会日本支部所属、対IS用特殊武装隊“天照隊”隊長、黒崎龍聖です」

「国際IS委員会？ 聞いた事のない組織だな。どういう組織なのだ？」

「え？」

「え？」

龍聖はまさかIS委員会を知らないことに驚きを隠せなかった。

「では、日本は？」

「日本だと？ 聞いた事のない国の名前だな。どこにあるのだ？ 誰か地図を持ってきてくれ」

「は!!」

美緒は近くに待機していた赤城乗員に世界地図を持って来る様、指示を出した。そして、出された地図を見て、龍聖は日本の場所を指さした。

「ここが、日本です」

「扶桑じゃないか!! どういう事だ!!」

〈マスター、宜しいですか？〉

「どこからの声だ!!」

急に第三者からの声が出た事に美緒を含め、全員が驚いていた。

「あつ、すみません。自分のものです。なんだ、エル?」

龍聖はエルから呼ばれたので、待機状態である小さな銀ナイフを首元から出す。

〈思い出して下さい、重力波に巻き込まれて自分たちはこの世界にやってきました  
……………と言う事は、考えられることとしたら、一つしかありません〉

「……………そう言う事か……………」

〈マスター、ハッキングが出来ないより、この世界、パソコンが無いから、ハッキングが出来ないんだよ!!〉

龍聖が納得している所に、アデイが泣きそうな声を出して報告をしていた。

「ちよい待て、アデイ。ハッキングしようとしていたのか!!」

〈だって、その方が手っ取り早いと思っただから……………〉

龍聖が咎めるように言うと、アデイは申し訳なさそうに言う。

「頼むから、一言、声をかけてから……………いやいや、それでもハッキングはアカンだろ!!」

「……………」

龍聖とアデイの漫才の様子を見て、美緒たちは固まっていた。

「黒崎、良いか？」

「あつ、すみません。そう言えば、後ろに控えている人たちの事は良いんですか？」

龍聖は美緒の近くにいる女性の後方で待機している少女たちを見て美緒に言う。

「そう言えばそうだったわ。赤城は航行できるの？」

女性がそう言うのと、一人の男性が現れた。

「赤城は残っている駆逐艦と共にブリタニア基地に向かい、修復した後扶桑に帰還する手筈となりました。少し時間は掛かりますが、駆逐艦の力をもつてすれば赤城一隻ぐらいは引く事が出来るはずですよ」

「了解しました。会議室などは使えそうですか？」

「ええ、問題ありません」

「では、すまないが会議室をお借りしたい」

「すぐに準備をさせます」

赤城艦長はそう言うのと、手の空いている乗員を呼び寄せ会議室を準備させに行く。

「詳しい話は会議室で」

「了解です」

美緒の言葉に龍聖は頷いた。

赤城艦内の会議室には美緒を始め、先ほどの女性たちや芳佳の姿があつた。そして、向かい側には龍聖が座っていた。

「さて、まず始めに先ほどの話を聞かせてほしい」

美緒が口を開くと、龍聖は頷いて説明をし始める。

「まず始めに、自分は並行世界からこの世界へとやってきました」

龍聖の第一声に皆が驚きをあらわにする。

「異世界だど!! ばかばかしい!! そんな与太話、信じられるか!!」

「トウルーデ、静かに」

「だが、ミーナ!!」

「私は静かに、と言ったのよ?」

トウルルーデと呼ばれた女性は、龍聖の言葉を信じられない様子で嘯みついたが、話が進まないと感じ取ったミーナと呼ばれた女性がトウルルーデを窘めた。だが、それでもトウルルーデは食い下がったが、ミーナの何も言わせない言葉に、トウルルーデも静かにせざるをえなかった。

「すみません、続けて頂戴」

ミーナは龍聖に説明の続きを促す。

「これまでの経緯を説明させていただきます」

龍聖はそう言うと、自分が所属する組織のトップから言われた場所へ赴くと、誰もおらず、突然、重力に引き寄せられ、この世界へとやって来た事を説明し、戦闘に介入した事を説明する。そして、最終目標としては元の世界へと帰還する事も説明した。

「では、オベロンと名乗った人物を消滅させれば、ネウロイもいなくなりあなたも、元居た世界へと帰れる。と言う事かしら？」

「ええ、間違っています。しかし、オベロンを討伐したからと言って、自分が元居た世界へと帰還できるかは判りませんが……」

龍聖はオベロンがネウロイを操っている事も説明していた。

「因みにですが、あなたの……えっと、なんていう名前でしたか？ 機体の名前は」

「マガツ・イカルガですか？」

「そう、マガツ・イカルガ。魔力を使わないという事ですが、弾薬などを含めた消耗品などはどうするつもりなのかしら？」

「……………」

ミーナの言葉に龍聖は何も言えなくなってしまう。ウィッチは魔力を動力とするストライカーを装着してネウロイと戦闘する。消耗した魔力は寝ていれば回復するので、問題は無いのだが龍聖の場合は違う。そもそも、マガツ・イカルガはエネルギーを充填して闘う機体である。使っているだけでエネルギーは消耗していくのである。弾薬もそうだが一番に考えないといけないのはエネルギー問題であった。

「こういう時に、銀鳳級や紫煙型がいれば、問題解決なんだがな……………」

「何ですか、その銀鳳級と紫煙型とは？」

龍聖は小声で呟いたはずなのだが、ミーナには聞こえていた様子であった。

「聞こえていましたか……………」

龍聖が説明をしようとした瞬間であった。

「ミーナさん、ネウロイの接近を感じしました」

「何ですって!!」

一人の少女の頭にダウンジングの様なもの浮かび上がると、緑から赤色に変色しミーナにネウロイが近づいてきたことを報告した。それと同時に、赤城艦内もネウロイ

接近を知らせるサイレンが鳴り始めたのであった。



## 第五・五話く支援艦隊

龍聖が元居た世界の太平洋沖に二隻の艦が航行していた。一隻は飛行甲板を持った航空母艦で、もう一隻に至つては航空母艦を凌ぐ大きさを誇る艦であつた。

「そう言えば、隊長のシグナルをロストしたのつて、この先の陸地ですよね？」

「ああ、その筈なんだが……………」

二隻が向かっているのは龍聖が消息を絶つた陸地であつた。なぜ、この二隻がそちらへ向かっているのかと言うと睦月からの指示であつた。また、航空母艦の格納庫には龍聖の部隊やもう一つの「武御雷隊」が出撃準備をしていた。

「良い、最終確認よ。全機発艦した後、黒崎隊長が消息を絶つた場所へ向かい、調べます。蟻一匹も逃さないくらいで痕跡を調べてください」

『了解!!』

「武御雷隊」隊長の山本智花が指示を出していた。本来であれば天照隊の副隊長が指示を出すのだが、武御雷隊と合同で探すとなれば、武御雷隊隊長の智花に任せるのが一番と睦月が判断した為、こういう形となっているのである。

「そろそろ、発艦できそうね。全員、機体を展開しなさい」

智花がそう言うのと、全員が機体を展開させる。第三世代型量産機「カルデイトーレ」が展開する。すると、格納庫に設置されているエレベーターが起動し、全員を甲板へと押し上げていく。

「全機、発艦!!」

智花がそう言うのとカルデイトーレを発進させる。続いて他の隊員も機体を発艦させていった。

「頼んだぞ、天照隊、武御雷隊……………」

艦橋で龍聖と近い存在であった山本俊輔が発艦していったカルデイトーレを見て、  
眩くのであった。

「艦長!!」

すると、一人の士官が叫び様に俊輔を呼んだ。

「どうかしたのか」

「大変です!! 船底から強力な重力波が!!」

「何だと!!」

俊輔は驚きの余り、叫んでしまう。

「機関最大、両舷前進!! この海域からの脱出を試みる!!」

『了解!!』

俊輔は瞬時に指示を出した。それと同時にもう一つの指示を出していた。

「通信士、天照隊と武御雷隊に連絡を」

「了解しました」

現状を伝えるために二つの部隊に通信を行う。

「こちら銀鳳、武御雷隊並びに天照隊の諸君に通達する。現在、我が艦と紫煙が強力な重力波に巻き込まれている事が判明した。これより脱出を試みるが………もしもの時は各自の判断で行動せよ」

〈俊輔!! 大丈夫なの?!〉

智花が俊輔の名前を呼ぶ。

「山本隊長、現在は任務中だ。普段通りの呼び方は辞めなさい」

俊輔と智花は夫婦でIS委員会に所属していたのである。

〈でも……〉

「だが、仕方が無い。緊急なんだ。しかし、焦りは禁物。今はお前たちが課せられた任務を遂行しろ。大丈夫だ。俺は絶対にどこにも行かないから」

俊輔は智花を安心させる為、普段通りに智花に言う。

〈気を付けて……〉

智花はそう言い残すと、通信を切った。

「宜しかったのですか？　もしかしたら脱出できない可能性も……………」

副艦長が俊輔の顔を伺うかのように言う。

「脱出できるかできないかは判らん。だが、先ほども言った様に焦りは禁物だ。それに、銀鳳と紫炎は最新鋭の機関を載せているんだぞ？　脱出できない訳がn「大変です!!」機関が安定していますが、一步も進んでいません!!」……………」

「……………」

俊輔と副艦長は顔を見合わせる。お互いに顔色は真つ青であった。

「か、艦長がフラグを建てるから!!」

「お、俺じゃないだろ!!　お前だって内心ではこの搜索が終了したら結婚するんだとか思ってたんじゃないのか!!」

なぜか始まった責任の擦り付け合い。言っている事は子供のケンカのようであった。

「艦長も副艦長も今はそんなことをしている暇ではないでしょうが!!」

火器管制を担当している高町なのはが二人を叱責した。

「これ以上、醜い争いをするのでしたら……………OHANASHIしますか?」

「すみませんでした!!」

なのはに對して土下座をする大の大人。平和な時であつたら笑い声が聞こえるはずだが、緊急時なので皆、見向きもしていなかった。

「重力波の状況は」

「依然、収まる気配がありません!!」

「艦長、紫炎が!!」

「な?! 紫炎が沈んでいく?!」

俊輔が見た光景は、紫炎がゆっくりと海面に沈んでいく様子であった。

「通信士、紫炎に通信を!!」

「やっています、ノイズが強く反応がありません!!」

「くそ、この重力波が原因か………ん?」

俊輔は異変を感じた。

「おい、銀鳳の角度はどうなっている」

「………角度10°。傾斜し始めました!!」

銀鳳も紫炎同様に沈み始めていたのである。

「こりや、脱出不可能だな………総員、退艦を」

俊輔の言葉に誰も従おうとはしなかった。

「総員、退艦だ。これは艦長命令だぞ!!」

「艦長、お言葉ですがその命令には従う事は出来ません。我々は皆、あなたと共に逝く事

を望んでいます。それは紫炎も同様でしょう」

「……………バカ者たちが……………」

俊輔は副館長の言葉に、被っていた帽子を深く被り直した。

〈俊輔!! 銀鳳が沈んでいるわよ!! 退艦しなさい!!〉

すると突然、智花が通信を開いたのである。

「……………すまん、脱出は不可能だ。それに、もし退艦したとしても、この重力波に巻き込まれてしまうのは必然だ。だったら、このまま艦に残って共に逝く事を決意した。すまん、約束を守れなくて……………」

〈いや!! 絶対にいや!! 私も逝くから!! 私一人、生き残るなんて嫌なの!!〉

「戻れ!!」

〈いや!!〉

俊輔の言葉に智花は拒絶し、いつの間にか銀鳳に着艦していた。そして、機体を量子変換させて艦橋へと向かった。

暫くした後、艦橋の扉が開き智花が入って来た。既に、銀鳳や紫炎の船体は半分以上が海中に沈んでいる状態であった。

「私も一緒に行くから。何が何でも、あなた一人だけを逝かせる訳にはいかないわ」

「馬鹿だな、俺一人だけじゃない。皆も一緒だ……………だが、ありがとう」

この言葉を最後に銀鳳級と紫炎型二隻は海中へと沈んでいった。残されたのは、静か

に揺れる海だけであつた。

## 第六話く支援艦隊

赤城艦内と他駆逐艦に、ネウロイ接近を知らせるサイレンが喧しく鳴り響いていた。501戦闘航空団、通称“ストライク・ウィッチーズ”は赤城格納庫へと来ていた。

整備兵が忙しくストライカーの整備をしていたのだが、突如としてストライカーの魔導エンジンの動かなくなってしまった。

「大変です!! ストライカー全機が動きません!!」

「なんだと!! もう一度、確認をしてみろ」

「了解!!」

整備兵がストライカーの不備を確認するが、どれも不備などなかったのである。

「どういう事だ……こんな事、初めてだぞ……」

「どうした!!」

すると、美緒が整備兵に詰め寄った。

「さ、坂本少佐……ストライカーが動かなくなつて……」

「なに?! 不備……ではなく、他の要因はないのか!!」

美緒は整備兵の不備を咎めたが、ストライカーと航空機を運用する航空母艦の整備兵



に至って、そう言う不備など起こす筈もなく、他に要因があると睨んだ美緒は整備兵に指示を出す。だが、すべての工程を行っている整備兵は、何度、同じことをしてもストライカーが動かない事を美緒に伝える。

「美緒、どうしたの？」

すると、ミーナたちが格納庫へと到着した。

「ミーナ、ストライカーが動かないらしいんだ」

「何ですって!?!」

「整備兵の不備じゃないのか？」

ミーナは驚き、トゥルーデは整備兵の所為にしていた。

「とんでもない!! 我々整備兵は、ウィッチの皆さんが安全に飛行できる様、ネジ一つから頭の中に入っています。それを、我々の所為にしてもらっては困る」

「なんだと!?!」

整備長の言葉にトゥルーデは掴み掛ろうとしたが、ミーナが手で制した。

「全機ですか？」

「はい」

「……………」

整備長の返事にミーナは黙ってしまふ。このままでは、ネウロイに蹂躪されて、自分

たちも扶桑からの艦隊も全滅してしまふ恐れがあった。すると、龍聖が口を開く。

「では、自分が出撃してネウロイを撃墜してきます」

「……いいだろう。黒崎、任せても良いか？」

「はい」

「美緒!!」

龍聖の言葉に美緒は任せることにしたが、ミーナはそんな美緒を咎めようとしていた。

「ミーナ。大丈夫だ。黒崎は三体のネウロイを一瞬で消滅させていたからな」

「嘘だろ………三体同時って、どういう動きをしたら出来るもんだよ………」

「シャーリー、私達でも連携してネウロイを倒すのに、同時って出来ないよね？」

「少佐、お言葉だが得体の知れないこいつに任せても本当に大丈夫なのか？」

501のメンバーは、龍聖が三体同時に消滅させたことに疑問を持っていた。だが、美緒の証言で信じる他なかった。

「では、坂本少佐の言葉を信じて黒崎さん、お願いしても良いですか？」

「判りました」

龍聖はミーナの言葉に委員会方式の敬礼をする。

その頃、扶桑艦隊の約5 km後方で、海面の時空が歪み、二隻の艦が現れる。

銀鳳級 I S 専用航空母艦と紫炎型工作艦であった。突如現れた重力波の影響で、龍聖と同じ世界へと飛ばされてしまったのである。

「……………クツ……………ここは、何処だ？ おい、起きろ。智花、起きろ」

そんな中、銀鳳の艦橋で艦長の山本俊輔が先に目を覚ました。そして、辺りを見渡すと、智花を含めた全員が倒れていたのである。俊輔は先に智花を起こした。すると、俊輔の声に他の乗員も目を覚ましました。

「艦長、ご無事でしたか……………それで、ここは……………」

「判らん……………だが、天国ではない事は確かだ」

「んん……………俊……………輔……………?」

漸く智花も目を覚ました。そして、俊輔はすぐに指示を出し始める。

「総員、被害情報を確認しろ。それと、GPSを確認し、場所を特定しろ」

『了解!!』

俊輔の言葉に乗員はすぐに行動に移る。

「智花、起きて早々、申し訳ないのだが……………」

「判ったわ」

「何も言っていないんだが……………」

俊輔の言葉を最後まで聞かないまま、智花は了承した。

「あら？ 夫婦だからこそ意思疎通は出来て当然でしょ？」

「……………そうだな。頼めるか？」

「了解」

俊輔が智花に頼もうとしたのは、カルデイトーレを使って周囲の確認を頼もうとしていたのである。

「では、出撃しますね」

「気を付けて」

智花の背中を俊輔は見送ると、すぐに表情を引き締めた。

すると、主計係が俊輔に近づいてきた。

「艦長、被害報告が纏まりましたので報告しても宜しいでしょうか？」

「ああ、頼む」

「では、銀鳳の被害報告ですが現状、目立った被害はありません。また、紫炎も同様の事です」

「なに?」

俊輔は重力波に巻き込まれ、海中に沈められたのにも関わらず、被害が一切ない事に訝しんだ。

「本当に被害はないんだな?」

「ええ、我々も驚きを隠せませんが……」

「艦長!! 大変です!!」

すると、GPSを使って現在地を探っていたオペレーターが声を上げた。

「どうした!!」

「GPSの反応が……ありません……」

「なんだと!!」

まさかのGPSが存在していない事に俊輔は驚きを隠せなかった。すると、出撃していた智花が通信を開いた。

「こちら、智花。5km先でIFFに反応がありました。マガツ・イカルガです!!」

「なに!! 黒崎隊長が生きているのか!!」

「へまだ、確証はありませんがIFFには反応していますが、どうしますか?」

「……………智花、すまないが先行して詳細を調べてくれないか？」

〈判りました〉

智花はカルデイトーレを、マガツ・イカルガの詳細な情報を得るために先行する。

「総員、智花隊長を追うぞ」

〈了解!!〉

銀鳳と紫炎の二隻は、先行した智花を追って機関を最大にするのであった。

## 第七話 支援艦隊到着

扶桑海軍の航空母艦「赤城」のエレベーターには龍聖の姿があった。エレベーターには龍聖の他に、赤城乗員がおり、ネウロイの情報を龍聖に伝えていたのである。

「ネウロイの数は二つ。二つとも大型です」

「さつき出てきたネウロイよりも大きいですか？」

「いえ、先ほどのネウロイと同等のクラスです」

「了解しました。情報提供、ありがとうございます」

「いえ、ストライカーが使えない今、あなただけが我々の希望の光なので、勝って下さい」

「了解」

龍聖は赤城乗員に笑う。

すると、エレベーターが甲板まで上がり、龍聖の視線の先には海しかなかった。

「機体を展開しますので、離れてください」

「判りました」

龍聖の言葉に従い、赤城乗員は龍聖の傍から離れた。また、甲板には赤城乗員の殆どが、龍聖の機体を見たいが為にだけに集まっていた。中にはなぜか、赤城艦長の姿もあつ

た。艦橋にいらなくていいのか、艦長よ……………。

「エル、アディ。いけるな？」

「マガツ・イカルガの内部を確認しましたが、特にこれと言った問題は見つかりませんでした。したが……………」

「弾薬に制限を掛けないといけない可能性があるの。そこら辺は留意しておいてほしいかな？」

「了解した。来い、マガツ・イカルガ!!」

龍聖は本来は言わなくても機体を展開できるのだが、こんなにもギャラリーが集まっているという気分には駆られ、つつい、機体名を言って展開した。

「行きます!!」

龍聖はマガツ・イカルガを屈伸させて、一気に機体を上昇させた。

「は、はえー」

誰が言ったのかは定かではないが、全員が思っていた。ストライカーの速度は最大でも850h/kmも出れば最速と言われている。だが、マガツ・イカルガはマツハー、5クラスの速度を出したのである。

「エル、武装に関しては全て任せる。アディは他にネウロイがないかを確認をしてくれ」



〈〈了解〉〉

龍聖はネウロイに向かいながら、エルとアデイの二人に指示を出していた。すると、アデイが何かノイズの様なものを拾う。

〈マスター、微かにですがノイズを確認しました〉

「ネウロイか？」

〈いえ、ネウロイとは違ったノイズで……………〉

アデイの言葉はそこで途切れた。

「アデイ、どうかしたのか？」

心配になった龍聖はアデイに問いかけると、アデイの口からとんでもない事が飛び出したのである。

〈IFFに反応あり!! これは……………武御雷隊隊長の山本智花さんのカルデイトーレです!!〉

「なに!! 周辺をくまなく調べてくれ……………もしかしたら銀鳳か紫炎のどちらかが来ている可能性がある……………まあ、本音を言えば紫炎が来てほしいんだがな」

〈弾薬の問題が一気に解決しますからね〉

「ああ、弾薬に問題が無ければ、持久戦も可能だからな。それからアデイ。通信可能位置になったらカルデイトーレに通信を頼む。もしかしたら、俺たちと同じように重力波に

巻き込まれた可能性があるからな……っと、そうこうしている内にネウロイの姿を目視した。これより攻撃を開始する。エル、ドラグーン・ナイトと執月之手ライフフィストの操作を任せつきりになるが、頼めるか？」

〈お任せを!!〉

頼もしいエルの返事に、龍聖は苦笑いする。

「行くぞ!!」

龍聖はマガツ・イカルガを駆ってネウロイに攻撃を仕掛けるのであった。

その頃、先行してカルデイトーレを駆っていた智花は、マガツ・イカルガのIFFを頼りに向かっていた。すると、銀鳳から通信が入る。

〈こちら、銀鳳。智花、聞こえているか?〉

「ええ、乾度良好よ。どうかしたの?」

〈もしかしたらの話になるのだが、俺たちの様に黒崎隊長は重力波に巻き込まれて、この世界に来た可能性がある。お前はそのまま先行して、黒崎隊長と思われる人物が向かつ

た先に行つてくれ。こちら最大船速で向かうから」

「判つたわ。武運を」

〈そつちもな〉

短い通信であつたが、智花には旦那である俊輔からの言葉は最高の燃料と言つても過言ではなかつた。

「さて、行きますか!!」

智花はカルデイトーレに量子変換されているブースターを展開する。このブースターはカルデイトーレの両肩部と脚部に装着され、速力を一気に加速させるものなのである。

「鬼と出るか、蛇が出るか……まあ、私はどつちも嫌いなんだけどね!!」

智花は展開し終わった事を確認すると、スロットを最大まで上げた。これにより、カルデイトーレの速力は従来の速度よりも何倍も加速していった。

数分後、マガツ・イカルガの姿を小さいながらも目視で確認する事が出来る距離まで近づいた。

「見えた。こちら、国際IS委員会日本支部所属対IS用特殊武装隊“武御雷隊”隊長の山本智花です。マガツ・イカルガの操縦者、聞こえていますか? 聞こえていたら返事をお願いします」

智花は通信を試みるも、まだ可能位置にはいない為、届くことはなかった。

「クツ、やつぱりGPSが無いという事がこんなにも不便だなんて……もう少し近づかないと……って、何あれ!?!」

智花が見たのは、これまで見た事もない航空機の様なものであった。だが、遠くからでしか見えない為、本当に航空機なのか定かではなかった。

「もつと近づかないと……でも、ブースターの燃料が」

既にカルデイトーレに装着されているブースターの燃料が枯渇していた為、これ以上の速度を出す事が出来ず、失速していた。

「間に合わない……ん? 航空母艦に駆逐艦……敵の可能性もあるけど……ここは俊輔に指示を貰った方がいいよね」

智花は実行に移す。

「こちら智花。銀鳳、聞こえますか?」

「こちら銀鳳。感度良好だ。どうかしたのか?」

「黒崎隊長と思われる人物が向かった先に行こうとしましたが、ブースターの燃料が切れてしまったので、補給に戻りたいのですが、今どこにいますか?」

「ちよつと待ってください」

俊輔はそう言うと、航海士に距離を確認していた。ものの数分で俊輔から通信が入

る。

〈間も無くそちらの事を目視できる距離まで来ているが、確認できるか？〉

「少々、お待ちを………確認できました。それから、私の近くに航空母艦と数隻の駆逐艦の姿を確認していますが、接触しますか？」

〈………いや、我々が到着したときに接触する。それまで待機だ〉

「了解しました」

智花は俊輔に言われた様に、上空で待機していた。

「現状は何も出来ないままか………もどかしいわね」

智花は静かに呟いた。

この先、どうなっていくのかは神のみぞ知る世界。龍聖も智花も知る由も無い。

## 第八話～暗躍

ガリアを占拠しているネウロイの巢に小王<sup>オベロン</sup>の姿があつた。

「やはり、あのネウロイは……………」

オベロンの目の前にはモニターが映し出されており、そこには龍聖が二機のネウロイと戦闘している姿を映し出していた。

「まさか、僕の知らないタイプのネウロイが……………僕の指揮下を逸脱したネウロイが存在しているのか……………厄介だな。このまま人類を我らネウロイの奴隷に出来るのであれば、それもよしだが、面白くは無いな……………」

オベロンはそう言うと言元を手で覆う。

「(だが、僕自ら出ても良いのだが、その隙を狙つてこの巢を横取りされてしまう危険性がある……………だと行ってこのまま<sup>龍聖</sup>奴を死なせるのには、それこそ僕の願いが消える……………)」

すると、オベロンの近くにとあるネウロイが近づく。

「ん？ お前は……………そうか、貴様が行ってくれるというのか？」

オベロンの言葉に、ネウロイは頷く様子はなかったが、オベロンはネウロイが頷いて

いる事を感じ取った。

「では、一機だけでよい。ネウロイを殲滅してくれ」

オベロンの言葉を聞き、ネウロイはそのまま姿を消した。

「さて、奴はどう動くかな……なあ、イブシリウスよ……」

オベロンはそう呟くと、姿を消した。そして、残されたのは何も無い空間だけであった。

その頃、龍聖は二機のネウロイと戦闘を行っている最中であつた。

「カルデイトーレの位置は」

〈扶桑艦隊の上空で待機している様子だよ。さつき、ブースターの反応があつたけど、やっぱり武御雷隊か天照隊の誰かじゃないかな?〉

「そう願っているんだがな!!」

龍聖はそう言うのと銃装剣ソレアットカインの引き金を引く。だが、ネウロイは見た目と反して、小回りな軌道を描き、攻撃を回避していた。

「チツ、厄介だな!! エル!! クロスファイアーを狙うぞ」  
 「了解!!」

龍聖は二機纏めて消滅させるつもりでいたが、二機とも機動力が良い為、攻撃を回避されてしまっていた。このままではジリ貧になる事は必須であると察した龍聖は、エルと共に一機ずつ消滅させる作戦に変更する。

「今です!!」

エルは空グーン・ナイトを操り、一機のネウロイを龍聖の元へおびき寄せ、あとは龍聖の銃装剣ソレアットカインの引き金を引くのを待つだけであった。しかし、その瞬間であった、もう一機のネウロイが突然、龍聖に向かって突撃を敢行したのである。

「マスタァ!!」

「クソ!! ここまでなのかよ!!」

龍聖はネウロイと衝突することを覚悟し、目を瞑った。だが、いくら待っても痛みを感じられなかった。龍聖が目を開けると、破片を散らしながら消滅していくネウロイの姿があった。

「どう言う……ことだ……」



〈マスター!! あれを!!〉

龍聖は驚きの余り、呆然としてしまったが、エルが何かを発見し龍聖に伝えた。そして、龍聖が目にしたのは、なんとネウロイと同じ色をし、のっぺらぼうの人型であった。「どういうつもりだ……ネウロイがネウロイを倒した、というのか……」

龍聖には理解する事が出来ずにいた。すると、人型のネウロイの様なものは忽然と姿を消したのである。

「消えた!?!」

〈ですが、これで一機に集中する事が出来ますよ〉

「そう……だな……」

〈マスター?〉

エルの言葉に龍聖は、納得がいかない様子であった。

「何はともあれ、残りを消滅させるぞ!!」

〈了解!!〉

龍聖はエルとアデイと共に残り一機のネウロイを消滅させたのであった。

とある海域の深い所で一人の女性が横になっていた。

「ん……童が送ったネウロイ二体が消滅した……のか……」

女性は目を瞑っており、傍から見れば眠っている様にしか見えないが、実際、女性は起きていたのである。

「一体は……知らぬ者だな。それに見た事もない兵装だ……もう一体は……奴か……」

女性の脳内にはネウロイから送られてきた情報が流れ込んでいた。龍聖が闘っていたネウロイを送り込んだのは、この女性であった。

「やはり人間は面白いものだな……見た事もない兵装を作り出すとは……だが、奴を倒すには戦力がまだまだ必要不可欠。一旦は引こう。だが、人間よ。童は人類を抹殺し、この星を童の手中に収めるつもりだ……相まみえる事を願っておるぞ」

女性はそう言うと、完全に眠りについた。

龍聖はネウロイ消滅を確認し、追加でネウロイが来ないか警戒していたが、その兆しが無い事を感じると赤城の元へと戻っていった。

「なあ、エルにアデイ」

〈何でしょうか、マスター？〉

〈どうかしたの？〉

赤城に戻っている最中、龍聖はエルとアデイに話し掛ける。

「いつになったらネウロイは地球から消えるんだらうかな………」

〈……………〉

龍聖の言葉に二人は答えなかった。否、答えられなかったのである。ネウロイがどうして地球を侵略を始めたのかさえ分からないのに、ネウロイと人類との戦いに終止符が

打たれるのはいつになると、断言できないからである。

「本当に戦争って……………」

龍聖はそこで口を閉ざした。龍聖の脳裏には自分が助けられなかった人たちの顔が浮かんでいたのである。

「俺、ここで決めたわ。ネウロイを一体も残さずに地球から殲滅させるって」

〈僕たちはマスターの意思を尊重します〉

〈うん。私たちはマスターがあつてこそその私たちだからね!!〉

龍聖の決意を聞いた二人は、龍聖を支持する事を伝えた。

「こんなマスターで済まないな」

〈何を言っているんですか!! マスターのお陰で色々な世界を見してきました〉

〈だから、この世界でも私たちに色々な世界を見せてよ!!〉

「ああ、そうだな!!」

龍聖の表情は晴れやかなものであった。

「そう言えば、カルデイトーレについて何か判った事はあるか？」

〈それがね、調べてみたんだけど……………パソコンなどの電子機器が無いこの世界ではまだGPSが打ち上げられて無いの……………だから、そのお……………〉

「皆まで言わなくていい。接触すればわかる事だしな。それに扶桑艦隊に攻撃を仕掛け

ていないんだろう?」

〈はい、新たな爆炎や煙は確認できません〉

「まあ、何はともあれ、接触する他無いだろうな。さて、鬼が出るか蛇が出るか………」  
龍聖はそのまま赤城へと向かって行くのであった。

## 第九話 支援艦隊、到着

赤城甲板では、501戦闘航空団や赤城乗員が、龍聖が帰って来るのを待っていた。

「黒崎さん、本当に大丈夫かしら………」

501戦闘航空団の隊長であるミーナ・デイトリンデ・ヴィルケが呟く。

「あいつのことだ。大丈夫だろう」

ミーナの言葉に反応したのは坂本美緒であった。美緒は501戦闘航空団の戦闘隊長を務めている。

「だが、少佐。本当に信用しても大丈夫なのか？」

美緒に対して疑いの言葉を掛けたのは、ゲルトルート・バルクホルンだ。彼女はミーナの副官的存在で、事務仕事ではミーナの右腕として、仕事を手伝っていた。

「でもさ、トゥルーデ。私は彼の事を信用してもいいと思っっているけどね」

「簡単に人を信用するな、ハルトマン」

ゲルトルートに対して言葉を発したのは、エーリカ・ハルトマン。彼女は撃墜数で勲章を授与されている世界最高峰のウィッチナのだが……私生活が、ね……。因みにトゥルーデと言うのは、ゲルトルートの愛称である。

「シャーリー、私たちのストライカーでもあんなに早くスピードは出せないよね？」

「ああ、そうだな……一度、乗せてもらいたいな……」

龍聖がいる先を見つめて会話をしているのは、フランチェスカ・ルツキーニとシャーロット・E・イエーガーである。この二人は特に仲が良く、一緒に行動している事が多い。

「なあ、サーニャ」

「なに？ エイラ」

「ネウロイの反応はないんだよナ？」

「うん、特に反応していない」

若干、一人は眠たそうにしているがいつもの事で、サーニャ・V・リトヴァクとエイラ・イルマタル・ユートイライネンである。サーニャは夜間哨戒が主な任務で、日中は寝ている事が多いが、ネウロイが出現したときには皆と一緒に出撃をしているが、極度の人見知りで、エイラとエーリカが仲が良い。

「キイイツ!! 坂本少佐に信用されるなんて、信じられませんわ!!」

そう地団駄を踏んでいるのは、ペリーヌ・クロステルマン。彼女は、美緒に対して信仰に近い感情を持っており、美緒に近づく新人に対してきつく当たってしまう節がある。

「(とつても、怖そうな人だな……………」

内心で龍聖に対して恐怖心を持っているのは、リネット・ピシヨップ。彼女は芳佳が入る数日前に501戦闘航空団に入隊している。

「大丈夫かな……………」でも、優しそうな人だったな……………」

そう呟いたのは、亡き父から手紙をもらい、美緒に無理を言っつてブリタニアについてきた宮藤芳佳である。

「ミーナ中佐、ネウロイとは違った何かを感知しました……………」

すると、索敵魔法を得意とするサーニヤが、ミーナに報告をする。

「どういう事なの、サーニヤさん」

「えっと、どう言ったらいいのか……………」

「はつきりものを言わないか!!」

サーニヤの物言いに語尾を荒くするトゥルーデ。それに体を震わせて、もう一度、確認をすると龍聖と同じ反応を検知したのである。

「先ほどの男性と同じものを纏った人がこちらに近付いてきます」

「敵か?」

「まだ、敵と確定していないわ。ストライカーの整備の方はどうなっていますか?」

トゥルーデは早とちりで敵と断定したが、ミーナが窺める。そして、動かないストラ



イカーの整備状況を整備士に確認をする。だが、結果は悲惨であった。

「ダメです。全て確認をしましたが、どこも異常は見られません」

「本国に送り返して整備してもらおう他無いのかしら？」

「そんなことをしている猶予はないんだぞ、ミーナ!!」

ガリアを占拠しているネウロイを一刻も早く、消滅させてガリア開放を望んでいるトウルーデ。そこには、何か焦っている様子があった。

「現状は維持。と言う事に「後方に二隻の艦影を視認!! 大和よりも大型です!!」なんですって!!」

すると、駆逐艦からの情報が赤城に入り、緊急放送で二隻の艦が近づいてきている事を伝えた。

「発光信号を確認……ですが、我々が知っている発光信号ではありません!!」

「今度こそ、ネウロイじゃないのか？」

「でも、ネウロイって水を嫌うんじゃないか？」

「確かに………だが、この状況をどう説明する」

「でもよ!!」

トウルーデとシャーロットが言い合いになりそうな時であった。龍聖が帰還したのである。

〈こちら、黒崎。間も無く帰還します。着艦許可を〉

ミーナがしているインカムに龍聖が着艦許可を求めてきたが、今はそれどころではなかった。

「こちら、ミーナ。黒崎さん。申し訳ないのだけど、今は着艦許可を出せないわ」  
〈それは、どう言う事ですか？〉

ミーナは龍聖の質問に答えようとした。すると、通信に介入する第三者の声がインカムに響く。

〈こちら、国際IS委員会日本支部所属、対IS用特殊武装隊“武御雷隊”隊長の山本智花です。黒崎隊長、聞こえますか!!〉

〈山本隊長!! どうして、貴女がここに!!〉

〈話は後です。現在、銀鳳と紫炎がこちらに向かっています〉

〈二隻とも来ているのですか!!〉

〈ええ、なので、情報共有をしたいのですが……〉

ミーナを差し置いて、智花と龍聖は通信を続けた。

〈情報共有と言ってもな……俺も数時間前に戦闘に巻き込まれたというか、首を突っ込んだというか……〉

〈ですが、アマツ・イカルガの弾薬も消費しているはず。まずは、補給を受けられては如

何でしょうか？

〈それもそうだな〉

話が纏まりそうになったのを見計らって、ミーナが口を開く。

「こちら、501戦闘航空団「ストライク・ウィッチーズ」隊長、ミーナ・デイトリン  
デ・ヴィルケ中佐です。近くに私たちの基地がありますので、そちらでお話を伺う事は  
出来ますか？」

〈山本隊長、山本艦長はどの様に仰っておられますか？〉

〈私に指示を出されたのは、待機との事です〉

〈判りました。指揮権はいつも通りで宜しいですか？〉

〈ええ、大丈夫です〉

〈判りました。まず、ミーナ中佐。一度、赤城に着艦許可を頂けませんか？ 自分から軽

く説明をしたいので〉

「判りました。艦長、宜しいですか？」

「あ、ああ。大丈夫です」

赤城艦長の言葉を聞いた、赤城乗員は素早く甲板にあるモノをどかし始める。

暫くすると、マガツ・イカルガの姿を全員が視認する事ができ、マガツ・イカルガは

ゆっくりと機体を赤城甲板に着艦させ、龍聖は機体を量子変換して姿を現す。

「ミーナ中佐。黒崎、ただいま戻りました」

「ご苦労様です。ですが、あなたは501に入隊していないのに、なぜ私に報告をするのかしら？」

龍聖は真つ先にミーナに戻ってきたを伝えると、ミーナは労いの言葉を龍聖に掛ける。そして、なぜ自分にその報告をするのかを尋ねた。

「今の指揮系統の中で言えば、貴女が最高権を所有していると判断したからですが、なにか間違っていましたか？」

「いえ、問題はありません。それで、あなたの支援艦隊はあとのくらいで到着しますか？」

「すでに近くまで来ているとの事ですが………エル。状況は？」

「現在、銀鳳並びに紫炎の二隻はこちらにまつすぐ向かってきています。数分もすれば視認距離です」

「との事です」

龍聖はエルに二隻の状況を確認し、ミーナに報告をする。

「それにしても、あなたのそれは、不思議ですね」

「なあ、自分専用機ですから………と言っていたら、到着したようですよ」

龍聖が指を刺した先には、銀鳳と紫炎の二隻が視認する事が出来たのであった。

## 第十話～説明会 1

龍聖が指を刺した先には、銀鳳と紫炎の二隻が視認する事が出来た。

「おつきい……………」

「大和…………いや、それ以上の大ききさだな」

芳佳と美緒は二隻の姿を見て、扶桑が誇る最高峰の戦艦を美緒は思い浮かべたが、それよりも巨大な姿に驚きを隠せなかった。

「こちら、国際 I S 委員会日本支部所属、対 I S 用特殊武装隊 “天照隊” 隊長、黒崎龍聖です。銀鳳、応答を願う」

「こちら、国際 I S 委員会日本支部所属、対 I S 用特殊武装隊 “天照隊” 専属艦、銀鳳。艦長の山本俊輔です。お久しぶりです。黒崎隊長」

「ああ。まさか二隻も俺と一緒にこの世界に迷い込むとは思いませんでしたぞ？」

「それは、我々も同様です。間も無く接舷しますが、赤城に接舷すればよろしいですか？」

「少し待ってください。ミーナ中佐。二隻を赤城に接舷させても宜しいですか？」

「ええ、そうですね。艦長、宜しいですか？」

「は？」

ミーナは赤城艦長に確認を取ると、赤城艦長も頷いて認めた。

「了解です。二隻に通達。赤城両舷に接舷しろ」

〈了解!!〉

龍聖の言葉に俊輔と紫炎の艦長が返事をする。

「では、二隻が到着した時点で皆様に説明をさせて頂きます。場所は広い方が宜しいと思いますので、紫炎の会議室を使わせてもらいましょう」

「そんな勝手なことを決めていいのか？」

龍聖の言葉に疑問を持った美緒が尋ねた。

「傍から見れば、勝手に決めている様に見えますが、あの二隻に関しては自分の部隊の専属艦。決定権は自分にあるんです。なので、問題はありません」

「そ、そうか」

龍聖の言葉に驚きを隠せない美緒。彼女も軍人として、誰にも相談なしに決めている龍聖に、軍人としてあり得ないと思っていたのである。

それから数十分後、二隻がゆっくと赤城に接舷を完了させる。

「こちら、黒崎。紫炎、応答を願う」

〈こちら紫炎艦長の桜井です〉

「お客様を会議室に通したい」

「了解しました。一番デカい会議室をお使いください」

「感謝する。では、皆さん、自分についてきてください」

龍聖はミーナたちに言うのと、紫炎に向かって歩き始める。それに続くようにミーナ達501戦闘航空団と芳佳、そして赤城艦長も続いて紫炎に向かって歩き始める。

龍聖と501戦闘航空団と赤城艦長の説明会は、第一会議室で執り行われることになった。この第一会議室は収容人数は最大で500名は優に入れる大きさを誇っている。だが、これまでに使用されたのは、極僅かな回数だけであった。

「それでは、皆様もお集まりになりましたので、これより説明を執り行わせて頂きます。まず始めに改めて自己紹介と、こちらにいる人物の自己紹介をさせて頂きます。質



疑応答に関しては、各々の自己紹介が終了してから、という形でお願いします」

龍聖はマイクを持って壇上に上がって喋り始める。龍聖の後方には複数の男女が立っていた。

「まず、自分ですが。国際 I S 委員会日本支部所属、対 I S 用特殊武装隊 “天照隊” 隊長の黒崎龍聖です」

龍聖は一礼すると、マイクを俊輔に渡した。

「初めまして、皆さん。自分は国際 I S 委員会日本支部所属、対 I S 用特殊武装隊 “天照隊” 専属輸送艦銀鳳級 I S 専用輸送艦一番艦 “銀鳳” 艦長を務めます。山本俊輔です」  
俊輔も一礼すると、マイクを桜井に手渡した。

「初めまして、自分は国際 I S 委員会日本支部所属、対 I S 用特殊武装隊 “天照隊” 専属工作艦紫炎型 I S 工作艦一番艦 “紫炎” 艦長を務めます。桜井雄介です」

雄介も一礼すると、マイクを智花に手渡す。

「皆さま、初めまして。国際 I S 委員会日本支部所属、対 I S 用特殊武装隊 “武御雷隊” 隊長の山本智花です。よろしくお願いします」

智花が一礼すると、マイクをそのままミーナの所へと持って行った。

「では、今度はこちらの方の自己紹介を始めさせて頂きます。私は 501 戦闘航空団通称 “ストライク・ウィッチーズ” 隊長、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケです。階級

は中佐を頂いています」

ミーナは自己紹介を終えると、マイクを美緒に手渡す。

「私は坂本美緒だ。階級は少佐。501戦闘航空団の戦闘隊長を務めている」

美緒はそう言うと、マイクをトウルルーデに渡す。

「私はゲルトルート・バルクホルンだ。異世界など、馬鹿々々しいと思っていたが、色々見て意識が変わった。よろしく頼む」

トウルルーデはそう言うと、マイクをエーリカに渡した。

「エーリカ・ハルトマン。よろしくね」

エーリカはマイクをシャーロットに手渡す。

「シャーロット・E・イエーガーだ。シャーリーって呼んでくれ」

シャーリーはそう言うと、マイクをルツキーニに渡す。

「フランチェスカ・ルツキーニ!! 虫って大好き?」

「ルツキーニさん。今は自己紹介の時間です。貴重な時間を使わないよう」

「ちえー」

ルツキーニは天真爛漫に言うが、ミーナに窘められマイクを大人しくペリーヌに渡した。その姿に龍聖たちは苦笑いをする。

「ペリーヌ・クロステルマン。わたくしは、まだあなた達の事を信用しておりませんの

で」

辛辣にペリーヌはそう言うのと、マイクをサーニヤに渡す。

「サーニヤ・V・リトヴァクです………エイラ」

サーニヤは眠たそうに自己紹介を終えると、マイクをエイラに手渡す。

「エイラ・イルマタル・ユージェイライネンなんだナ。よろしくナ。サーニヤに手を出したら許さないんだナ」

エイラはそう言うのと、マイクをリネットに手渡す。

「リ、リネット・ビシヨップです………」

リネットは恥ずかしそうに自己紹介を終えるとマイクを芳香に手渡す。

「宮藤芳佳です。先ほどは助けて頂きありがとうございます」

芳佳は龍聖の方を見て頭を下げる。芳佳はマイクを赤城艦長へと手渡す。

「扶桑海軍、遣欧艦隊旗艦赤城艦長の杉田です。救援をして頂き、艦隊の代表として感謝の意を述べさせて頂きます」

杉田艦長はそう言うのと、龍聖たちに向かって一礼する。そして杉田艦長がマイクを置いたのを確認すると、龍聖が口を開いた。

「では、これで全員の自己紹介を終えましたので、質疑応答を始めたいと思います」

## 第十一話～説明会2

「では、次に質疑応答と、今後の事についてお話をしていきたいと思えます。まず始めに、こちらから質問をしても宜しいでしょうか？」

「ええ、お願いします」

龍聖はミーナに確認をすると、ミーナは頷いて了承する。

「まず、ネウロイと言うのはどう言う存在なのでしょう？ 自分もいきなり戦闘に介入はしましたが、敵の存在が判らないままでは、戦闘を行う事は出来ません」

龍聖はネウロイの事を真っ先に質問をした。

「では、私からお答えします」

ミーナがマイクを持って立ち上がる。

「1939年。突然現れた異形な存在です。この存在は世界各地で見られており、ネウロイは巢を張り、そこから小型、中型、大型問わずに現れては、街を無差別に攻撃します。現在、我々501戦闘航空団は、ガリア開放の為に結成された部隊です」

「ありがとうございます。では、こちらからの質問にお答えしますが、どなたかありますか？」

「では、私から良いか？」

「どうぞで」

龍聖の言葉に美緒が手を挙げる。

「異世界から来た事は疑っていないのだが、ネウロイを見た事が無いという事は、そちらの世界ではネウロイは存在していませんか？」

「ええ、ネウロイは存在していません。しかし、ネウロイがいらない代わりに人同士の戦争があり、これまでも多くの人民が犠牲となってきました」

「そうか……」

龍聖の言葉に美緒は納得する。

「では、今度は私から良いだろうか？」

「山本艦長？ どうぞ」

龍聖の隣で座っていた俊輔がマイクを持って立ち上がる。

「そう言えば今のこちらの年代は何年ですか？」

「1944年ですが……？」

「え？」

「え？」

俊輔の質問に答えたのは、ミーナである。そして、龍聖たちは自分たちがいた世界よ

りも何十年も前の世界、そして、パラレルワールドに來ている事を改めて思い知る。

「我々のいた世界でしたら、1944年は第二次世界大戦中でしたね」

「その第二次世界大戦と言うのは、聞く限りだと人同士の戦争が世界規模であった。それも二回もという認識で間違いないか？」

「ええ、その通りです」

龍聖の言葉に反応したのは美緒である。そして、美緒からの質問の答えたのも龍聖であった。

それから暫く、質疑応答を繰り返し、会議が始まってから二時間も経っている事に気付いた。

「おっと、そう言えば皆さんは基地に戻られるんでしょね？」

「ええ、そのつもりです。現在、赤城を扶桑海軍の駆逐艦数隻をもって曳航する事となっております」

「では、その曳航。私たちが担いましょう」

こう切り出したのは俊輔であった。俊輔には思惑があった。

「一つ、お尋ねしたい。なぜ、あなた達の艦が赤城を曳航する必要があるのでですか？」  
俊輔に対して質問を投げたのは、赤城艦長の杉田である。

「質問にお答えします。理由としましては、対空防御の充実を課したいからです」

「しかし、赤城一隻に対して駆逐艦四隻で曳航する予定です。現在、残っている艦艇は十隻。四隻抜いたとしても、六隻は残りますので輪形陣を敷けば、対空防御としては事足りるかと考えております」

「では、こちらからも質問をします。現在の艦隊で真面に航行できる艦は残っているのですか？」

「……………」

俊輔からの質問に、杉田艦長は口を閉ざしてしまふ。なぜなら、駆逐艦十隻の内、真面に航行できるのは四隻しかないからである。そして、その四隻を使つて赤城を曳航するつもりだった。残りの六隻に至つては、先のネウロイからの攻撃により機関が損傷したりして、全力航行が出来ないのである。要するに、真面に航行できない艦については、ネウロイからの攻撃に対して盾になつてももらい、撃沈されても仕方が無いと言う曳航作戦だった。

「もし仮にもネウロイからの襲撃があつた際、赤城を守りながら対空防御は可能なのですか？」

「……………仰る通りです。損傷艦については盾になつてもらう予定でした」

「でしようね……………ですが、紫炎で赤城を航行すれば問題ないと言ひ切れます」

「それはなぜですか？」

俊輔は自信満々で言うつと、杉田艦長はなぜ言ひ切れるのかと質問する。

「まず、紫炎には特殊兵装が搭載されています。まだデータは採れていませんが、ネウロイ如きのビームは簡単に弾くことは可能です。そして、銀鳳が先行し、赤城周辺を駆逐艦で護衛してもらえれば、ネウロイからの攻撃に対して、特殊兵装を使用する事により、艦隊全てを守る事が出来ます。そうすれば、盾となる駆逐艦がなくなり、戦力も削ぐ事も無く基地へ帰投し修復が出来ると言ひ事です」

俊輔からの説明に杉田艦長は納得せざるを得なかつた。もしも、自分たちが考えた作戦を実行し、ネウロイからの襲撃があつた際、全ての艦艇が撃沈される事態となれば、赤城の乗艦している501戦闘航空団を海の藻屑となつてしまふ恐れがあるからだ。仮に龍聖が撃退したとしても第二、第三と続けばどうしようもない状況へと陥つてしまふ恐れがあり、俊輔の言葉を信じ、考案された作戦を実行し無事に基地へと帰投する事が出来れば、扶桑海軍としても最大限の消耗で抑えられるので、恩の字なのだ。

「判りました。山本艦長の作戦で帰投します」

「賢明な判断です」



片や対ネウロイ戦に多く出撃してきた航空母艦の艦長、片や対人戦闘等に駆り出され多くの戦果を挙げてきた航空母艦の艦長。戦歴が違えど、味方に対しての見方は同じであった。

「では、黒崎隊長。後はよろしくお願いします」

「判りました」

俊輔は龍聖に後を託すと、銀鳳へ戻り出航する準備へと戻る。

「自分も赤城曳航の準備に取り掛かります」

「よろしくお願いします」

雄介も赤城曳航の準備の為、紫炎に戻った。

「さて、ミーナ中佐。今後の事についてお話をしましょう」

「ええ、そうですね」

第一会議室に残された501戦闘航空団十芳佳と龍聖は今後の事についての協議を始めるのであった。

## 第十二話～天照隊、参戦ス

その後、ネウロイからの攻撃も無く、艦隊は無事にブリタニア軍港へと到着した。ここで、赤城と随伴艦である駆逐艦が修理されることになっていたのである。そして、タグボートで曳かれる赤城を見送る銀凰の甲板には、赤城艦長杉田の姿があつた。

「皆様には感謝の念しかありません。この度は、曳航して頂き誠にありがとうございます」

杉田の前には紫炎級IS工作艦一番艦紫炎の艦長を務める桜井雄介と、銀凰級IS輸送艦一番艦銀凰の艦長を務める山本俊輔、そして、天照隊隊長の黒崎龍聖の姿があつた。

杉田は三人に対して、深くお辞儀をする。

「頭を上げてください。我々は出来る事をやっただけですから」

「そうです。俊輔艦長の言う通りです。我々が出来る事をやっただけですから」

「それに、攻撃をされている艦を見過ごせる訳にもいきませんから」

俊輔、雄介、龍聖の順番に杉田に声を掛ける。

「そう言つて頂けると幸いです。では、私はこれで」

杉田はそう言うと、乗つてきたボートに乗り込みブリタニアの軍港へと消えていっ

た。

「さて、黒崎隊長。今後の事を話さなければいけませんね」

「ああ、その通りだな。雄介艦長、501の方々は？」

「既に基地の方へと戻られています」

俊輔は今後の行動の事について、雄介を交えて話をつもりでいた。

「では、会議室の方へと行きましようか」

龍聖の言葉に二人は頷くのであった。

「なんだと!! 小王が生きていただと!!」

「ああ、はつきりと確認をしている。エル、映像もしくは音声を出せるか？」

〈可能です。出しますか?〉

「頼む」

銀鳳級の会議室で、今後の事を話し合っていた三人は、飛ばされる前の世界で死亡確認をしている小王が生きている事に雄介と俊輔は驚きを隠せずにいた。

龍聖はエルに頼み、自身と小王が話している映像を流した。

「た、確かに小王だな……………だが、奴は今度は何を企んでいるのだ？」

「さあな、こればつかしは奴でないと解らんよ……………だが、奴はまた我々の敵になった。という事で間違いない……………だが、ネウロイを従えているとなると、厄介だな」

「ああ、それともう一つ。エル、頼む」

〈判りました〉

龍聖は紫炎と銀凰が到着する前に現れたネウロイを、別のネウロイが倒し、龍聖を手助けした映像を流した。

「ネウロイがネウロイを倒した……………」

「まさかとは思いが……………」

俊輔と雄介は、身内を何の躊躇いも無く倒したネウロイの姿に驚いていた。

「このネウロイを倒したネウロイだが……………もしかしたら別の勢力が存在している可能性がある」

「ネウロイ同士で戦っている。と言う事ですか？」

「ああ、可能性だがな」

「……………ですが、なぜネウロイ同士で戦う必要があるのでしょうか？」

雄介は理解し難いと言った感じであった。だが、これは俊輔も龍聖も同じであった。

「判らん。だが、これも可能性の話になるのだが、ネウロイ同士で覇権争いをしているのかも知れん」

「覇権争い、ですか？」

雄介のオウム返しに龍聖は頷く。

「奴らも一筋縄ではない。と言う事だ……だが、これで厄介ごとが増えたな」

「ええ、その通りですね」

「全くだ」

まさか、異世界に飛ばされたと思いきや、戦闘に介入し、倒したと思っていた小王が生きており、それが敵のトップに君臨しており、別のネウロイの勢力が存在する。厄介以外の何者でもなかった。

「だが、俺たちは何もしいまま、指を啜えて元の世界に戻るつもりは無い」

龍聖の言葉に雄介と俊輔は頷く。

「そこで、俺なりの考えを言わせてほしい」

龍聖は二人に、ある考えを説明した。

「……………確かにこのまま指を啜えて傍観者になるつもりはありません。私は黒崎隊長の考えに賛同いたします」

「自分も同じくです」

龍聖の考えに二人は賛同した。

「ありがとう。では、先方には俺から伝える」

龍聖はそう言うのと会議室を後にする。

「しかしまあ、隊長も難儀な人だな」

「だな。一隊長として若い時から担って来たのにも拘らず、驕る事も無く部下や他の人間の意見に耳を傾ける。だから、皆、あの人についていくんだろうな。年下とか関係なく」

残された雄介と俊輔は、隊長である龍聖で話が盛り上がった。

「入ってもいい?」

「ああ、いいぞ」

すると、会議室の外で智花が入室の許可を求めてきたので、俊輔は許可を出すと智花は会議室へと入って来る。

「話は纏まった様ね」

「ああ、流石に小王が関わっていると、見過ごせないからな。まあ、関わっていないくても見過ごせないけどな。特に隊長が」

「確かにその通りね」

その後、三人は龍聖からの通信が入るまで思い出に浸るのであった。

数日後、ブリタニアの501戦闘航空団の港に紫炎と銀鳳の姿があった。

「それでは、皆さんも知っている通り黒崎さんたちを含む皆さんが、我々に協力をして頂けることになりました」

501戦闘航空団のブリーフィングルームに龍聖たちの姿があった。

「改めて自己紹介をさせて頂きます。国際I S委員会日本支部所属、対I S用特殊武装隊 “天照隊” 隊長の黒崎龍聖です」

「同じく天照隊専属艦、銀鳳級I S専用輸送艦一番艦 “銀鳳” 艦長の山本俊輔です」

「同じく天照隊専属艦、紫炎級I S工作艦一番艦 “紫炎” 艦長を務める桜井雄介です」

「国際I S委員会日本支部所属、対I S用特殊武装隊 “武御雷隊” 隊長の山本智花です」  
「“よろしくお願ひします”」

龍聖たちはお辞儀をする。すると、全員から歓迎の拍手が送られるのであった。

こうして、龍聖たちは501戦闘航空団に協力をするようになったのである。

## 第十三話く休息

第501戦闘航空団が拠点としている、ブリタニアの基地では、紫炎や銀凰の姿があった。そして、紫炎の艦内では整備士達が忙し無く動き回っていた。

「おい、イカルガの弾薬一式を持ってこい!!?」

「カルデイトーレの部品を持ってこい!!?」

紫炎級はI S専用の工作艦として天照隊並びに武御雷に配備されている艦であり、規格から全てが同じように建造されている為、有事の際には各隊の機体の整備が行えられる様に備えがされていた。また、紫炎はマガツ・イカルガの専用艦としての機能も備わっており、マガツ・イカルガ専用の部品や弾薬が備蓄されていたのである。

「皆、一旦休憩しよう」

「はっ!!? 休憩だ!」

格納庫に姿を現した龍聖が、休憩するように言うと、整備士のリーダーが休憩の指示を出す。二機に取り付いて整備していた整備士達は機体から離れ、各々に準備されている軽食や飲み物に舌包みを打っていた。

「整備長。イカルガの補給状況はどうなっている?」



「こちらをご覧下さい」

龍聖はイカルガの整備状況が気になり、整備長に尋ねると、整備長はタブレットを龍聖に差し出す。

「……………やはり、弾薬の消費率が高いな」

「仕方ありません。イカルガは元々、一对多を視野にセカンドシフトした機体なので  
すから」

「まあ、そうなんだが……………だが、紫炎に備蓄されている弾薬にも数の限りがあるだろ  
？」

「その事なのですが、一つ、提案があります」

「？」

整備長は後ろに置いてある一発の銃弾を龍聖に見せる。

「これって……………カルデイトーレの弾薬じゃないか……………まさかとは思いますが、これをイカルガに載せる。と言う話か？」

「最悪の場合は、と言う言葉が先に付きますがね」

「だが、そうせざるを得ない状況に陥る可能性があるんだな？」

「正直な話、イカルガの弾薬に關しては紫炎艦内で製造することは可能ですが、本土のよ  
うに大量に作れる訳ではありません。ある程度はこちらでも準備を整えてはいるので

が、連続で戦闘が続いてしまうと、焼石に水の状態です」

整備長の言葉に、龍聖は何も言えなくなる。

「エネルギーに関しては、小型エネルギー発生装置がイカルガ内部にある為、そう簡単にエネルギーが枯渇する心配は有りません。しかしながら、ネウロイから発せられるビームの威力がどの程度のものなのかが分からないままでは、過信することもできません」  
「そう……だな」

龍聖はイカルガに目をやる。

「では。私も休憩に行かせて頂きます」

「すまないな、長く話し込んでしまつて」

「いえ、我々は隊長に隊長に着いて行くと決めた手前、簡単に仕事を投げ出す気はサラサラありませんから。では」

整備長も休憩に向かつていく。

「エル、アディ。聞こえているな？」

〈へはい〉

龍聖の問いかけに、コアの人格であるエルとアディが返事をする。

「弾薬の消費を抑えたい。なので、これまでの様に数で戦う戦法を止めて、質で戦う戦法に切り替えるから、設定を組み直してくれないか？」

〈了解しました〉

龍聖は二人に「頼んだ」と言っつて、格納庫を後にする。残された二人はマガツ・イカルガの設定を組み直す作業を開始した。

〈アデイ、ミサイル関係は僕に任せて、レールガンの設定をお願いしてもいいですか？〉  
〈うん!!？ あつそうだ。私が持っている情報を共有しておくね〉

〈助かります〉

整備士達が休憩に行っている間に、設定の組み直しをやろうと決めた二人であった。

その日の夜。龍聖は第501戦闘航空団の隊長であるミーナ中佐の執務室に来ていた。

「黒崎龍聖です」

『どうぞ』

ミーナからの許可を得た龍聖は「失礼します」と断りを入れ、執務室に足を運ぶ。

「来てくれてありがとうございます」

「いえ、こちらとしても用事がありましたので丁度良かったです。それで、お話というのは？」

龍聖はミーナ直々に呼び出しを受けていたのである。また、龍聖自身もミーナに伝えることがあつた為、タイミング的にはバッチリであつた。

「そうでした。連合軍の上層部が貴方達と話がしたいと、申し出があつたのよ」

「成る程。上層部の狙いとしては、我々の技術を盗む魂胆ですね？」

「いえ、そうではないわ。いや、一部の上層部はそれもあると思うけど、それは一部の上層部だけよ。それで、連合軍の上層部が貴方達と話がしたい理由だけど、貴方達がいち世界のことを聞きたいそうよ」

ミーナの言葉に龍聖は、訳が解らなくなってしまう。

「待つて下さい。自分達がいち世界のことを知つてどうするつもりなのですか？」

「そこまでははつきりとしたことは判つていないわ。でも、もしかしたらの話になるけど、自分達にも貴方達と同等の力を得られるんじゃないかと考えているのかも知れないわね」

「成る程………ですが、正直に申し上げますと、我々と同等の力を得ることは不可能に近いと思いますよ」

「どういう意味かしら？」

龍聖は簡単にISができた理由について説明する。

「そういうことなのね。確かに貴方のいう通りだわ。宮藤博士なら話は別なのかも知れないけど……………」

「宮藤博士って、宮藤さんの親類ですか？」

「そういえば、貴方達は知らないのも無理はないわ。私たちが履いているストライカーユニットを開発したのが、宮藤さんのお父さんなの」

「では、現在もご存命なのですか？」

「……………」

龍聖の言葉にミーナは黙ってしまふ。

そして、重い口を開けた。

「残念ながら、宮藤博士は不慮の事故で亡くなられているわ」

「それは……………」

龍聖はと言ったらしいのか、迷ってしまふ。

「でも、博士がいたからこそ、ネウロイと戦闘ができているのも事実。これからは、各国がユニットを開発して行って、ネウロイと戦って行くことになると思うわ」

「ネウロイが消えた世界は、どういった世界になっているんでしょうね」

「何か言ったかしら？」

龍聖は小さく呟いたが、ミーナの耳に微かに聞こえていた様であった。

「いえ、何も言っていないせん」

「そう。それで、貴方も私に話があると云っていたけど、どう云った内容なのかしら？」

ミーナは思い出したかのように、龍聖が自分に話がある事を思い出した。そのことに、龍聖は心の中で安堵した。

「そうでした。我々から一つ、お願いしたい事がありました」

龍聖は懐に仕舞っていた紙をミーナに手渡した。

「……………許可したいけど、上層部との話し合いが済んでからになると思うわ」

「解りました。では、此方としても幹部と話して決めたいと思います」

「よろしくね」

「はい」

龍聖はミーナの言葉に返事をすると、執務室を後にした。

そして、一人残されたミーナは用紙に書かれていた内容を、もう一度読み返した。

「私の一存では決めかねないわね」

ミーナはそう呟くと、用紙を机の上に置いて執務室を後にした。

用紙に書かれていたのは、小王討伐作戦の内容を纏めた用紙であった。

## 第十四話く会談

ブリタニアの軍総本部の一室に、ミーナや龍聖達の姿があつた。

「無事に扶桑からの増援と補給が届いた様だが？　そして、外部からの協力者が基地に加わつたと聞いているが？」

「坂本少佐含め、補充員一名。そして外部協力者複数人がガリア解放作戦に参加して頂けることを承諾しています」

部屋にはブリタニアの首相とマロニー将軍がミーナ達と面談をしていた。

「戦力増強は有難い。一刻も早く、ガリアを解放しなければならぬ」

「しかし、ネウロイの襲撃が不定期になっていると聞いているが、そのところはどうかね？」

ブリタニアの首相は501に戦力が増強されたことに嬉しく感じているが、マロニーはそれでもなさそうであつた。

「確かに、今までの週一回のパターンから徐々に感覚が狭まってきています」

ミーナはありのままを説明した。

「今のままの状況では、いかんだらうな」

マロニーはミーナの言葉を真つ向から否定する。

「現場を無視した空論を述べられるのは、お断りをしている筈ですが？」

ミーナの言葉にマロニーは顔を顰め、ミーナを睨みつけた。

すると、見兼ねて首相が咳払いをする。

「結果が出ればそれで良いのだよ」

「ご安心下さい。私達501と此方の黒崎さん達、外部協力者と共にガリアを解放致します」

ミーナははつきりと言った。

「それで、もう彼らと話しても良いのかね？」

ミーナとの話を終え、龍聖達とブリタニアの首相は話がしたそうにしていた。

「そうでしたね。黒崎さん」

「はい」

ミーナに呼ばれて龍聖が前に出る。

「外部協力者としてガリア解放の手伝いをしてくださることを、首相として、そして、個人としても感謝の意を述べさせて頂きます。ありがとうございます」

首相は立ち上がると、龍聖に向かって頭を下げた。

「ちよ??? 一国の首相が簡単に頭を下げないでください!!?」



龍聖は首相の行動に驚きを隠せなかった。

「私からも感謝する」

マロニーも同様に頭を下げた。

「あ、頭をお上げ下さい」

龍聖の言葉に二人は顔をあげ、席に座り直した。

「それで。私達は君たちに聞きたい事がある」

「まずは、私から話させてもらおう」

先に口を開いたのはマロニーであった。

「私から君たちに対して、戦闘データの提出、そして機体の提供、操縦方法の伝授、機体の製造方法、戦闘艦並びに工作艦について知りたい」

マロニーはISのことを知りたがっていた。だが、龍聖は見逃さなかった。マロニーの瞳の中に映る黒い炎を。

「残念ですが、機体の提供並びに製造方法、戦闘艦、工作艦の内部までは説明する事が出来ません」

龍聖はマロニーから出された注文に対して、断りを入れた。そのことにマロニーは憤慨する。

「なんだと、貴様!!? 貴様達が持っている技術を使えばネウロイを倒すことも出来る

だろうに!!?」なぜ、それを断るのだ!!?」

マロニーの言い分は最ものことだが、龍聖は冷静に対処する。

「私の説明不足でした。まず初めに機体の提供ですが、残念ながら、私の機体ともう一つの機体のパイロットに関しては、外す事が出来ません。また、余分に余っている機体はありません。なので、機体の提供が出来ません。次に製造方法ですが、私達パイロットには機体の製造方法までは知らされていません。また、機体の製造は出来ても肝心のコアが無ければ、動かすこともできませんし、コアが製造することが出来るのは、ある博士の力があつて出来たものであり、我々もコアのことまでは知らないのです。そして、戦闘艦と工作艦の二隻についてですが、確かに私の部隊が専属艦として運用しています。しかしながら、あの二隻もまた、製造する事が出来ません」

「はて、それはなぜなのでしょう?」

龍聖の説明に疑問を持った首相は訪ねる。

「……………二隻に使われている機関部は、この世界の置いてはオーバーテクノロジーであり、扱いを間違えれば人々が住めなくなってしまう焦土と化してしまふからです。また、運用にあたっては決められた技師でないと動かすことも出来なくなっています。その為、二隻については渡す事が出来ません」

龍聖はブラフを交えながら説明する。マロニーは説明を聞いて何も言えなくなつて

しまう。そして、止めとばかりに龍聖は言葉を続ける。

「もし、我々の技術を武力を持って奪取あるいは、強奪するおつもりでしたら………自爆させ、海の藻屑にします」

「……………チツ」

龍聖の嘘偽りのない言葉に、マロニーは舌打ちをした。

「では、今度は私から」

マロニーが話し終えたと読み取った首相が口を開く。

「もし仮にネウロイがこの世界からいなくなったとした場合、世界はどの様になると考えていますか？」

「っ!!?」

首相の言葉に強い重みを感じた龍聖は、驚きを隠せなかった。まさか、ネウロイがいなくなった後の世界を考えている人物がいるとは思いもしなかったからである。

「……………失礼しました。質問にお答えします。これはあくまでも私個人の私見になりますが、宜しいですか？」

龍聖の言葉に首相は頷く。

「では、続けます。まず、ネウロイがいなくなった後、世界に残るのは焦土と化した国土があります。小国であれば、大国に飲まれて国自体が消えます。そして、それに抗おう

とする人々が立ち上がり、紛争に発展し、最終的には世界を巻き込む世界大戦が起きる可能性ががあります」

「ほう、それはそう思ったのですか？」

「……………私達がいいた世界にはネウロイが存在していませんでした」

「なんと!!？」

龍聖の言葉にマロニーは驚き、首相に至っては口に出していた。

「しかしながら、ネウロイという存在がないからこそ起きるものもあります」

「それが、世界大戦ですか？」

首相の言葉に龍聖は頷いた。

「私達がいいた世界では、3度の世界大戦が起きました。そして、国土は焼かれ、多くの人民の血が流れました。そして、戦ってきた軍人もまた多くの血を流し、流され血で血を洗う泥沼の様な戦争が起きました。紛争は数が数えきれない程、勃発しとある人物がこう言う言葉を遺しています。『平和とは、戦争の前準備ではない』と」

龍聖の言葉を聞き、二人は何も言えなくなってしまうのであった。

## 第十五話　顔合わせ

龍聖達はその後、ブリタニアの首相とマロニー將軍との話を終えた翌日。龍聖達はミーナに呼ばれて執務室へと来ていた。

「黒崎龍聖並びに銀鳳艦長山本俊輔、紫炎艦長山城雄介、武御雷隊長山本智香、三名参りました」

『どうぞ？』

内部からミーナの許可が出たので、龍聖達は執務室へと足を踏み入れる。

「よく来てくれましたね。改めて皆さんの階級と物品の支給、後は他のメンバーに自己紹介をして貰う事になっています」

「質問、宜しいでしょうか？」

ミーナの説明に、疑問を持った龍聖が挙手をして質問をする。

「自分達の階級ってどういう事でしょうか？」

「いきなりこんな話をされて、解る訳ないわね。では、一つ一つ、説明していきます。まず初めに階級についてですが、先日、ブリタニアの首相並びにマロニー將軍閣下と極秘で話し合いを行い、現状のままでは指揮に関して支障を来す恐れがあるとして、皆さん

に階級が与えられる事になりました」

ミーナの説明に龍聖達は納得をする。前の世界では、龍聖達の階級としては、龍聖が大佐相当の階級を保持しており、智香も同様に大佐相当の階級を与えられている。また、俊輔と雄介に至っては、少佐ないし中佐の階級を与えられていた。これは、天照隊と武御雷隊の隊長であるという理由だからだ。

「それで、黒崎さん達は独立部隊として、この501戦闘航空団の外部協力者という形で収まり、黒崎さんをトップに据え大佐としての階級が与えられています。智香さんについては、副隊長として中佐の階級が与えられています」

「あら、私の階級が一つ落ちてしまったわ」

「これはあくまでも暫定的なものです。次に俊輔さんと雄介さんについてですが、お二人は艦長という役職なので少佐の階級が与えられています。他の乗組員についても下は少尉で最大が大尉の階級が与えられる事になっています。ここまでに質問はありませんか?」

ミーナの説明に龍聖達は首を横に振る。

「では、次に物品の支給についてです」

そこから、ミーナは龍聖達に一つ一つ細かく説明をしていくのであった。

一方、その頃。501のミーティング・ルームでは皆が退屈そうにしていた。

「おつそーい!!?」

ルツキーニが騒ぎ始める。

「まあまあ、ルツキーニ。焦ったって何にもならないぞ?」

「でも、遅いんだもん」

シャーリーが不貞腐れているルツキーニの頭を撫でながら言う。

「でも、本当に遅いですわね。バルクホルンさんは何も聞いていないのですか?」

「ああ、私は何も聞いていないが………坂本少佐」

「ん? なんだ」

バルクホルンが美緒の名前を呼んだ。

「どうしてこんなにも時間がかかっているんだ?」

「さあな。私もミーナから何も説明を受けていないんでな。なんとも言えん」

美緒は肩を上げた。すると、漸くミーティング・ルームにミーナが先頭で龍聖達が入ってきた。

「皆さん、お待たせしてしまつて申し訳ないわね。改めて自己紹介をしてもらいます。

黒崎さんからお願ひします」

ミーナは龍聖達に改めて自己紹介をしてもらう為、龍聖達を前に出した。

「では、改めて……………独立機動部隊 “天照隊” 隊長の黒崎龍聖だ。階級は大佐となる」

『は?』

「同じく独立部隊 “天照隊” 副隊長の山本智香よ。階級は中佐よ。よろしくね」

『へ?』

「同じく独立機動部隊 “天照隊” 専属艦、銀凰級航空母艦一番艦 “銀凰” 艦長の山本俊輔だ。階級は少佐となる」

『……………』

「同じく独立機動部隊 “天照隊” 専属艦、紫炎級工作艦一番艦 “紫炎” 艦長の櫻井雄介です。階級は山本艦長と同じく少佐となります」

『……………』

主な船員の自己紹介に誰も何も言えなくなってしまう。何せ、龍聖はミーナよりも階級が一つ上の上官になり、智香についてもミーナと同じ階級になっているのである。驚くなどというのが難しい話である。

「それから、もう一つ。皆さんにお知らせします。彼らについては、この基地ではなく艦船内で過ごされます。なので、無闇に二隻に近づかない様に、くれぐれも気を付けてく



ださい。いいですね？」

『了解!!?』

ミーナの言葉に、龍聖達天照隊を除く、全員が返事をする。

「それから、宮藤さん」

「は、はい！」

ミーナに呼ばれた芳佳は勢いよく立ち上がる。

「貴女にも渡しておかないといけないものがあるの。少し、いいかしら？」

「は、はぁー?」

芳佳はミーナから何を渡されるのか判らず、壇上の方へと向かっていく。すると、芳佳の目に小さな箱と、その上に置かれている拳銃に目が行った。

「これがこれから貴女が基地で過ごすにあたっての物資になります」

「あ、あの」

ミーナの説明に横槍を入れる芳佳は、おずおずといった様子であった。

「拳銃はは要りません」

「あなた!!?」

芳佳の言葉にペリーヌが噛み付く。彼女が芳佳に噛み付くのも無理はない。彼女の母国であるガリアは、ネウロイが占拠して巢を作っているからだ。また、この501部

隊に来たのも、ガリアを一刻も早く解放する為である。だが、芳佳は武器を取らなかつた。それは、戦線を放棄しているに等しく、ペリーヌの思いを踏み躪られていると、彼女自身が感じてしまったからである。

「しかし、軍に入隊するに当たって必要なものです。持ちたくないと言っても、持たざるを得ません。なので、貴女の気持ちで持たないという選択肢はないのです。いいですね？」

「……………はい」

ミーナの言葉に芳佳は渋々、頷くのであった。そして、そんな彼女をペリーヌは睨みつけるのであった。

「では、この後、黒崎さん達は私と一緒にもう一度執務室の方へお願いします。それでは解散」

ミーナが解散の号令を掛けると、全員が立ち上がりミーナに対して敬礼をする。ミーナは一度、全員の顔を見てから返礼をした。

## 第十六話　戦闘開始（前）

解散の号令の後、龍聖達はミーナに着いて行き、もう一度執務室の方へと来ていた。

「皆さんには窮屈な思いをさせてしまいますが、ガリア解放の手助けをお願いします」

「構いませんよ。我々も基地の一部を使わせて頂いている身ですから。それで、我々も訓練を行いたいのですが、基地周辺の海域を使っても宜しいですか？」

ミーナは龍聖達に申し訳なきようにいうが、龍聖達は気にする様子はなかった。逆に、訓練をするから基地の周りを使っても良いかと聞くほどである。

「え、ええ。この基地の周りは漁船は愚か、小舟を航行するには難しい航路となつていますから、問題はないですけど……」

「けど？　なんですか？」

ミーナは最後まで言葉を続けず、龍聖達を見る。

「皆さんの艦艇については見せても大丈夫なのですか？」

ミーナの心配は異世界からきた龍聖達の銀凰と紫炎を、部隊以外の人間に見せても良いかという事であった。

「先日の会談の時にもお話をしましたが、我々の艦艇に使われている動力部などについ

ては、模作が出来ない物となっておりますから、見られたところでは何も出来ませんよ」

龍聖の言葉に、俊輔達は頷く。銀鳳や紫炎に関しては、動力部がISコアなのと、小型の核融合炉を搭載している艦なので、この世界で模作しよう物ならば、篠ノ之東の存在が必須となっている。また、小型核融合炉についても同様で、開発者の一人である東ともう一人の変態博士、ジェイル・スカリエツィが必須である。

「自分達も詳しい内容についてまでは、技術者ではないので知らないです。なので、我々に建造のお願いをされても、何も出来ないのが正解です」

「判りました。では、今後の協力体制の会議を行おうと思うのですが、宜しいですか？」

「はい。大丈夫です」

その後、龍聖達はミーナと、この基地での行動内容や、指揮系統の確認などを行うのであった。

翌朝、基地にはネウロイ接近を知らせるサイレンが鳴り響いていた。

龍聖達もすぐに基地に戻り、ミーティングルームに入る。

「監視所から報告が入ったわ」

ミーナが指揮棒を使い、地図に記されているマークを動かす。

「敵、グリット東1-4地区に侵入。高度はいつもより高いわ。今回はフォーメーションを変更します。美緒、お願いできるかしら？」

「ああ」

ミーナに呼ばれた坂本美緒は壇上上がり、フォーメーションを説明する。

「バルクホルン、ハルトマンが前衛、シャーリーとルツキーニは後衛。ペリー又は私とペアを組め」

「「「はいっ!!?」」」

美緒からの説明に名前を呼ばれた五名は、返事をした。

「残りの人は、私と一緒に基地で待機です」

「「はい」」

名前を呼ばれなかったエイラ、芳佳、リネットが返事をする。

「我々からも良いでしょうか？」

「はい、なんでもしょうか？」

聞いていた龍聖が拳手をして質問をする。

「我々天照隊からも、一名、参加させても宜しいですか？」

「誰でしょうか？」

「自分です」

龍聖は自身も作戦に加わると申し出たのである。だが、ミーナは渋った。

「ですが、もし仮にもう一機のネウロイが出た時は「それについては問題ありません。山本智花が待機しているので」……そういう事でしたら、参加を願いますか？」

「了解」

龍聖の説明にミーナも納得し、龍聖を作戦に加わる事を了承する。

「では、出撃開始!!？」

『了解!!?』

美緒の言葉で全員が立ち上がり、作戦が開始された。龍聖は急いで格納庫へと向かいつつ、智香に通信を繋げる。

「こちら黒崎です。智香副隊長、聞こえていますか?」

《聞こえています》

「これより、自分が作戦に加わる事になりました。その為、基地防衛に副隊長を就けますので、お願いします」

《了解しました。お気を付けて》

通信が終わると同時に、龍聖は格納庫へと到着した。滑走路にはストライカーユニットが待機しており、作戦に参加する者達がユニットを装着し、魔導プロペラを回していた。

「フォーメーション順に出撃だ」

美緒の言葉で、バルクホルンとハルトマンが先行して出撃をする。そして続く様にシャーリーとルツキーニも出撃していった。

「先に行かせてもらうぞ、黒崎中佐」

「止めて下さい。坂本少佐。今は同じ仲間です。階級予備はやめましょう」

「それもそうだな。私のことは美緒でも坂本でもなんでも良いぞ」

「では、坂本さんで」

龍聖と軽口を言い合う美緒の姿を見て、ペリーヌは悔しそうに見ていた。だが、美緒はそれに気づく様子はなかった。

「では、先に行かせてもらう。いくぞ、ペリーヌ！」

「はい、坂本少佐!!？」

美緒とペリーヌも出撃していった。

「さて、取り残されたのは俺だけってことね。まあ、大丈夫でしょう。いくぞ、エル、アデイ」

〈了解〉

龍聖はエルとアデイに声をかけると、首に掛かっているネックレスを取り出す。

「マガツ・イカルガ、機動!!？」

龍聖がそういうと、ネックレスが光り輝くと同時に、機体が展開され龍聖を包み込んだ。そして、光が収まるとマガツ・イカルガを身に纏った龍聖が現れる。

「この言葉、どうも恥ずかしいのだけど？」

「気にしないでください。僕たちは気にしませんから」

「へそうそう、エルくんの言う通りです。私たちには無関係ですから」

二人の言葉に龍聖は肩を落とした。だが、作戦行動中な為、すぐに気を引き締めた。

「いぐぞ」

龍聖はP I Cを使い格納庫から出ると、一気にスラスターを噴かして基地を後にするのであった。